

---

# コードギアス 相反のライ ~ 双璧の軌跡 ~

star

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

コードギアス 相反のライ〜双壁の軌跡〜

### 【Nコード】

N9721V

### 【作者名】

star

### 【あらすじ】

一つの悲劇が回避され、新たな悲劇が訪れる。負の連鎖は止まらなかつた。

深い闇に堕ちたライ。カレンは一途にパートナーの、愛する者の目覚めを待つ。たとえ他の者達がライを忘れようとも……そんな中、ある人物が彼女の元を訪れる。この時、彼らの物語は完全に変貌した……

騎士団ルート、スザクにギアスをかけたBADENDのお話。ライ

カレです。

「全てを犠牲にしても、護りたい人がいますか？」

第一話 悲劇の連鎖（前書き）

BADENDから始まる物語。  
ここから悲劇は始まった……

## 第一話 悲劇の連鎖

カレンと学園祭を見て回った。戦い続きの連続で、久しぶりにカレンとゆっくりできた。本当に楽しかった。またこうしてカレンと一緒にいたいと、そう思っていたのに……

なのに、現実がそれを許してはくれなかった。事態は止まることなく、僕達に試練を突きつけてくる。

お忍びで来ていたのか、ユーフェミアが学園祭の場で『行政特区日本』の設立を宣言した。

彼女の発言が、その場どころか日本全体……いや、ブリタニアをも、世界さえをも巻き込む騒ぎを呼ぶ。

聞こえこそいいかもしれない。

だが、もし騎士団が参加すれば日本独立という大義名分が奪われ、参加しなければ平和の敵として民衆の信用を失う。

……つまり行政特区日本は騎士団にとって、一挙に追い詰める策でしかなかったのだ。

学園祭は混乱と騒乱の内に終了した。僕は生徒会の雑事も一段落させ、一息つこうとクラブハウスの裏手に出た。

先客がいた。

「……………」

スザクは無言で夕陽を眺めている。

「……………スザク」

「やあ、ライ……………」

いつもの学園でのスザク。穏やかな笑顔。戦闘時の覇気はまったく感じられない人懐っこい顔だ。

「なぜ……………僕とカレンのことを……………」

僕とカレンが騎士団に所属しているということは神根島の一件で

既にスザクに知られている。

だからこそ警戒していたのだが、スザクと学園で会っても、あの日からまったく変化はない。

「軍規違反なのはわかっている。だけど、こっちでは戦いでなく、君たちを説得したい」

「……………」

「君やカレンにしたら甘い考えかな？　だけど、あきらめたくないんだ」

「……………それが、君の道か」

「うん……………そうだ。君たちも、ユーフェミア様の特区に参加してくれ！」

「僕たちが、特区日本に？」

「そうだ。君たち黒の騎士団が参加すれば、ほかの日本人たちもきっと特区に賛同してくれるはずだ。戦いを終わらせることができるんだ。平和が作れる。みんなの平和が！」

それは、夢物語だ。現実には甘くない。ユーフェミアは理想を語っただけで、スザクはそれを信じているだけだ。

……ここでギアスを使えば、特区は……騎士団は……

スザク。君は間違っているんだ。間違った世界を破壊するのなら、その内側に取り込まれてはいけない。

「スザク！」

「……？」

「ライが命じる！ 黒の騎士団に加わり、ゼロの進む道を切り開け！」

僕は全ての力を声にこめて、スザクに命令した……絶対遵守の、王の力で……



「う……あ……僕が……?! ゼロ……お、俺が……騎士団……」

スザクが苦しみはじめた。なんなんだこれは……? 王の力に抵抗しているのか!?

これまでギアスを使った相手で、こんな反応は見たことがなかった。

「あ……と、父さん……嫌……だ……ぐうッ……」

……これが、スザクの意志の強さというのだろうか?  
ギアスの命令にも抗う、この強さが。

「ぐ……あ……ああーッ!」

……しばらく苦しみ悶えていたスザクだったが、やがて静かに立ち上がった。彼の瞳は赤く縁取られていた。



黒の騎士団はこの機を逃さず武力蜂起。ゼロとスザクを先頭にトウキョウ租界を一気に制圧したのである。

トウキョウ租界の陥落はあまりに過ぎなかった。黒の騎士団に呼応し、全国で名誉ブリタニア人も含めた日本人が蜂起。

またたく間に広がった解放戦争の炎はついにブリタニア軍の撤退という結果を勝ち取り、ゼロは高らかに宣言した 『合衆国日本』の建国を。

-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-

「よく来てくれたな、ライ」

「なんだ？ ふたりだけで話とは？」

日本が解放され、今日は団員達によってアジトで祝勝会が開かれているのだが、僕はゼロに呼び出され、人気のないゲッターの倉庫街に来ていた。

「なに、礼を言いたくてな。スザクを仲間にしてくれた礼を」

「ゼロとスザクの力が合わされば、もはや敵はないさ。事実、日本は独立を取り戻した。」

これからブリタニアが攻め込んできたとしても、ゼロやスザク、藤堂さん……そして僕とカレンの騎士団の双壁がいれば、日本は安泰だ」

「ああ、できればそうだったよ……お前と共に、これからも戦っていきかけた……」

「？ ゼロ？」

「スザクを仲間にした……その結果をもたらしたことは感謝している……ただ一点を除けば」

「ただ、一点？」

「あのスザクが、一夜のうちに我々の考えに賛同して合流してきた理由だ」

「それは……僕とスザクが話し合って」

「話し合った結果、ギアスを使った」

「!？」

「そつだな？」

「……すべては、君のためだ。君と共に歩む道を切り開くため。あの状況を打破するためにも必要だった……君だってスザクを仲間を迎えたがっていただろう！」

「俺は、スザク自身の意志で賛同して貰いたかったんだ！ そうでないならば、敵同士になったほうが良かった！」

「！」

「お前は、俺の意地とプライドと……そして友情に泥を塗った！ この行為は許し難い！」

「何を言ってる……僕こそ、君の……」

ゼロの仮面が一部開き、瞳が見えた。

「ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアが汝に命じる！ 永遠の闇に眠れ！ ライ！」

なぜだ？

どうしてだぜ口。ただ僕は君のために……みんなの、日本のために……

「……ル、ルルーシュ……」

「おやすみ、ライ」

昔、契約者が言ったことと同じ言葉。なのに、ルルーシュの声には何も感情がこもっていなかった。

僕はまた眠りについた。ただしあのころと違って、底の見えない……永遠の闇の中に……

## 第二話 届かない声（前書き）

行政特区をユーフェミアが宣言した日に、ライがスザクに『騎士団に加われ！』とギアスをかけてしまいます。

スザクが騎士団に加わったことで日本解放には成功するものの、ゼ口の反感を買ってしまったライ……

正直言って、「これはないだろ」って思いましたね。

というかルルーシュに言いたいことがあります……

「DSでスザクに『仲間になれ！』ってギアスをかけるお前が言うな！」

## 第二話 届かない声

黒の騎士団は最大の障害を排除し、最強の戦力を手に入れた。

ゼロと私達騎士団の双璧、スザクと言った面々の前に、コーネリアでさえも戦況を立て直すことができず、ついに日本を取り戻した！

今日は祝勝会ということで、アジトは今までにない盛り上がりを見せている。今までの戦いがようやく実をむすんだから、その喜びは計り知れない。

……なのに、どうしてあなたがないの？ ライ……

これまでの戦いの中でも数々の戦功をたててきた、ライの姿だけがどれだけ探しても見つからない。

「扇さん、ライを見てませんか？」

「いや、まだ見ていないが……来ていないのか？」

「先ほどから電話もかけてるんですけど……全然でないんです」



ゼロの姿も見えないが、ゼロは元々神出鬼没だったしそんなに心配していない。こういう賑やかな場に積極的に参加するとも思えないし……

「……ただ、ライは？」

「ライも日本開放のために共に戦ってきて、その喜びも大きいはず。みんなで一緒に集まって喜びを分かち合う人なのに……全然姿を現さない。」

「（ライ……あなた、一体どこに）……【プププププ】！　もしもし！」

『カレンか……今から私が言う病院にすぐ来てくれ』

「ゼロ！　病院って……なんですか？」

『……ライのことだ。詳しくは今はいえない。すぐに来てくれ！』

「！　わかりました！」

「ライが、病院に？　それに、今は言えないって……まさか、ライの身に何かが！？」

「私は扇さんに一言言つと、アジトを後にした。なんだかよくわからないけど……嫌な予感しかしない……！！」

- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -

病院に着いた私はすぐさま二人を探す。  
すると、病室の前で座り込んだゼロの姿が見えた。

「ゼロ！」

『…………カレンか』

「ライは…………ライはどこに!？」

『…………だ』

ゼロが目の前病室を指差す。

…………病室の中では点滴を受けて、静かに眠っているライの姿があった。

「ライ！」

私はいても立ってもいられず、病室の中に入っていく。

……しかし、何度呼びかけても声は返ってこない。何度手を握っても握り返してこない。

「……ライ？」

「彼は今……意識を完全に失っています。つまり、植物人間の状況に陥っています。回復は……難しいかと」

「……！」

私は思わず専門医の胸倉を掴んでいた。

「どづいづいとー!？」

「わ、わからないんです！ 体に外傷がなければ異常はありませんし、臓器にも問題はない。原因がまったくつかめないんです！

まるで……彼自身が目覚めるのを拒絶しているような……」

「ふ、ふざけないで……！ そんなことがあるわけ……！……！」

『やめるカレンー!』

「！ゼロ……それじゃあ……ライは……」

『……』

「！」

ゼロは何も言わずに、首を横に振った。

つまりそれは、ゼロもライの回復は望めないと判断したと言っている……嘘だ！！

「ねえライ！ 起きて！！ 私よ、紅月カレン！！」

嘘でしょ、もう起きないなんて……私を驚かそうとしてるんですよ！？ ねえ！」

私はライの腕を持ちながら、ライの肩をゆすりながら、ライにひたすら呼びかける。

信じられない！ 信じたくない！！ やっと、やっと日本を取り戻して、みんなと一緒にいられると思ったのに……なのに！！

何度も声をかけた。何度もライの手を握りしめた。

それでも、彼は何の反応も示さなかった。目を開けなかった。何もしゃべらなかつた。

あの青い綺麗な目が見えない。  
いつも私を気遣ってくれた優しい声が聞こえない。  
私を勇気付けるために私の手を握ってくれたあの感触が感じられない。

彼の時は……完全に止まっていた。

「お願いだから……もう自分勝手なことなんてしないから！ 困らせたりしないから！ ずっと傍にいるから！  
だから……だから目を開けてよライ！！」

どれだけ叫んでも、病室には私の声だけが響いている。  
ライは指一本動かさない。

「お願い、だから……傍にいて……私を、一人にしないで！！」

『カレン……無駄だ。いくら呼びかけても、ライは……もう……』

「！ 嘘よ……そんなの、そんなのって……ッ！ ライイイイイイ  
イイイ！……！」

私はただ叫ぶことしかできなかった。叫んでもライは反応しないとわかってるのに。

それでも、信じたくはなかった。認めたくはなかった。

私達は日本を取り戻した。その代わり、それ以上に大切な人を失ってしまった……

誰よりも日本のことを、私たちのことを思ってくれていたライを

……

## 第二話 届かない声（後書き）

カ「ライ……ライ……!!」

ル「……」

C「……」

作「……（重い！ 今までの後書きの中で一番空気が重い……!）  
えー、どうだったでしょうか？ 一応ギアスをかけた後、ルルーシ  
ユがライを病院に運んだという設定です。いや、本当に捨て置いた  
っていうなら本当にルルーシユが人でなしのように感じますし……」

ル「あいつがしたことは許せない……だが、あいつが今まで俺達の  
ために戦ってきたのも事実……」

作「各々が様々な思いをめぐらす中、事態は加速していく。はたし  
て彼らの運命は……!？」

### 第三話 紅蓮の騎士、迷走

一週間。日本がブリタニアから解放されて一週間がたとうとしていた。

未だに日本に残るブリタニア軍の残党・地方部隊を掃討し、もはや日本は完全にブリタニアから独立したと言ってもいい。

ブリタニアは数多くの植民地を持っているが、その植民地が独立してしまうなど前代未聞の事態であり、日本に呼応してほかのエリアでも反ブリタニア活動が広まっているという。

そのため、ブリタニアはEUや日本だけでなくこうしたエリアの対処にまで部隊を動かさなければならなくなり、日本には一時的平穩が訪れていた。

騎士団の皆は遂にブリタニアの勢力を一掃し、皆生き生きとしている……ただ一人、私を除いて。



この一週間で、騎士団の皆がライのお見舞いに来る数が減ってしまった。

皆、新しい日本の国作りやブリタニアの防衛に向けて忙しい毎日が続いている。

私は怖くなってきた。そのうち、皆がライのことを忘れてしまうのではないかって。

今では、騎士団の双壁と言えば私とスザクと言われるようになってきた。

ライと一緒に戦い抜いて、背中を預けるほどになって手に入れた『双壁』の名が、今ではスザクのものになっている。皆、今はいいライよりも、今いるスザクの方が大切なのだろうか……

……たとえ、皆がライのことを忘れても、せめて私だけは覚えていたい。最後まで、ライの目覚めを傍で待っていたい。

「……ライ」

いつからだっただろう。

日本より、ライの方が大切になっていた。

日本の解放より、ライの傍にいたかった。

あの日から何度も後悔している。  
ちゃんと想いを伝えておけばよかった。ただ一言、『好き』と伝えておけばよかった。

「ねえ、どうしてこんなことになっちゃったのかな？」

何が間違っていたのだろう。どこで間違ったのだろう。

一緒に学園祭も楽しんで、日本も開放して、皆と一緒にいられるはずだった。

なのに、誰よりも一緒にいたかった貴方がいない……

これから私はどうすればいいんだろう？  
今までは、戦い抜けば明るい未来が待っていると信じていたのに、その望みはあっけなく崩れ去った。

神様というものは本当に残酷だ。

絶望から救い出されたと思ったら、今度は更に深い絶望を私達に突きつける。

もう、ナイトメアにも乗れないよ。何のために戦えばいいのかわからない。

もう、ライの傍から離れたくない。これ以上貴方と離れたくない。

「ライ……好き。愛してる……お願い、目を覚ましてよ」

貴方の声を聞きたい、貴方の綺麗な目が見たい、貴方が手を握ってくる感触をかみしめたい。

ライ。お願いだからもう一度呼んで、私の名前を……

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

「本当に、弱いわね。私は」

冷静さを取り戻すために、一度飲み物を買いに病室から出た。

もしライがいたら、優しい彼のことだ。そつと励ましてくれただろつ。

いなくなつてからやつとわかつた。彼の優しさが、温かみが。

私の強さは、全部ライがいたからこそだつたんだ。ライがいたからここまで戦つてこれたんだ。

どうしてもつと早くに気付かなかつたんだろつ。

「ライ……」

病室に戻つても、ライは眠つたままだつた。

最初はひよつとしたらと期待していたけど、そんなことは起こらなかつた。

彼はひたすら夢を見続けている。現実に戻つてきて欲しいと願つても、彼は目を覚まさない。

「何が悪かつたのかな？ どうして、こんなことになつちやつたのかな？」

私にはもうわからない。何が悪かったのか。どうすれば、彼が助かったのか。

「教えてあげようか？」

「！……子供？ どうしてここに」

突然私の呟きに答えるように、後ろから声がかかった。  
身長から……小学生くらいだろうか？ 髪がとても長く、床に届く勢いの金髪をしている。

「はじめまして、紅月カレン。僕の名前はV・V。」

「V・V.？」

何なのこの子……？ C・C.みたいな名前、そして見た目とはかけ離れて大人びた様子。

それに、どうして私の名前を!?

「細かいことは気にしなくていいよ。僕は君に真実を教えにきたんだ」

「真実……?」

「そう。例えば……どうしてライが目を覚まさないのか、とかね」

「! どういうこと!? なんで、ライのことを……ッ!」

どうして私やライのことを知っているかなんてもうどうでもいい!  
この子は知っている! 誰もわからない、ライがこうなった原因を!

「やっぱりゼロからは聞いていないんだね。言えるわけないか。彼がこんなことをしたんだもんね」

「!?!」

ゼロが……!?! そんなことあるわけが……彼も、私も、日本人がみんな信じているあの人が……

「ゼロは、超常の力を持っている。他人を意のままに操る力を」

「そんな、馬鹿な話が……」

「君は不思議に思わない？ なぜ体に何の異常もない彼が目覚まさないのか。むしろ辻褄が合うはずだよ。力があつたとして、今までのゼロの行動を振り返れば……ライは、ゼロのせいだ、目を覚まさないんだ」

「……」

「まだ信じられないかい？ なら教えてあげるよ。ゼロの正体、力の詳細、彼がその力で今まで一体何をしてきたのか……そしてどうすればライが目覚ますのかを」

「……」

「聞くだけでいいんだ。それをどう判断するかは君次第。君の考えで動けばいい」

たとえば、ゼロのことが嘘だとしても……本当にライが目覚ますなら、私は……

私は何も言わずに、こくりと頷いた。

### 第三話 紅蓮の騎士、迷走（後書き）

作「……これなんてカレン裏切りフラグ？」

ル「こればかりは、ライにしかとめられない……」

作「しかし、そのライがこの状態ですしね。えー、このカレンはアニメ一期以上にルルーシュへの不信感が高まっていますね。次回でライ復活するでしょうけどキャンセルーで」

C「ルルーシュ・スザクVSライ・カレンか……枢木が騎士団に加わり、双壁がブリタニアに付くというのか……皮肉な話だな」

作「ルルーシュ・スザク騎士団VSブリタニア（ライ・カレン）みたいな？ でもライは戸惑うでしょうね。騎士団と戦うこともですけど、カレンが自分のせいでブリタニアにつくって……」

C「カレンはむしろ……『ゼロ……よくも、よくもライを……！』  
みたいな形で襲い掛かりそうだがな」

作「ルルーシュが『俺たち二人揃えばできないことなんて……！』  
って言うてましたが、その二人と双壁が正面衝突する……！ どちらが勝つんでしょう？ 微妙なところなんです……」





『永遠の闇に眠れ』というルルーシユのギアス。その闇はあまりにも何もなくて、あまりにも残酷だった。

おそらく今の僕はまだ生きているのだろう。生きていなければ、この闇だって消えているのだから。

眠れといっても夢を見ているわけではない。だけど、これは悪夢以上にたちが悪い。

……あれからどれくらいたったんだろう。

数日？ 数週間？ 数ヶ月？ あるいは数年？ もっとだろうか、それさえわからない……みんなはどうしてるんだろう。

カレンは大丈夫だろうか？ やさしい彼女は多分僕のことを心配しているだろうけど、僕はその彼女に何もしてあげることができない。むしろ迷惑をかけているんじゃないだろうか……

せめて、僕のことを忘れてくれていればいいんだけど……せめて、僕のことを忘れて、誰かと幸せに生きてくれれば、僕はそれで……

「ライ？」

……？ カレン？ カレンの声が……聞こえる？

なんでだろう。今までは何も聞こえなかった空間から、僕が求める声が聞こえた。

「ライ！」

……これは、夢なのか？ それとも……

「ライ、起きて！」

……？ 光が見えて……！

「ライ！ ライ！ 良かった！ 良かった……！」

「……か、カレン！？」

カレンが僕の温もりを確かめるように、力強く抱きしめてきた。  
見える……？ まさか、ギアスが解けたのか！？ 絶対遵守の王  
の力が、何で！？

「目が覚めたのかい？」

「はじめまして、ライゼル様」

「！ 誰だ！？ ……！ ジェ、ジェレミア！？」

見ると部屋にいたのはカレンだけではなかった。

小さな子供と……そして、かつてナリタの戦いで戦死したはずの  
ジェレミア・ゴットバルトだった。

「僕の名前はV・V。彼女にお願いされて、君を起こさせたんだ  
よ。ジェレミアの、ギアスキャンセラーで」

「……ギアスキャンセラー？」

「そう。どんなギアスであろうと、ギアスキャンセラーはそのギア

スを解除することができる。たとえば、王の力であろうとね」

「はい。私のキャンセラーはどのような力にも対応できます」

「……それじゃあ、本当に『ギアス』っていうのは本当だったのね」

「!? ま、待て！　なんでカレンがギアスのことを……」

なんでカレンが……彼女には僕だって話していない！　力も見せていない！　なのになんで彼女が!?

「……ライ。全て聞いたわ。ギアスのことも、ルルーシュがゼロだったってことも……」

「!?」

「僕が話させてもらったよ」

「……君は何者なんだ？　なぜゼロのことを知っている？」

見た目は小学生と変わらないくらいなのに、先ほどからの口調や、知っている内容、明らかに小学生とは思えない。

「C・Cと似たようなものだよ。僕も不老不死ってことさ」

「君も……C・Cと同じ……」

「まあ、僕らは一度退室するから二人でゆっくり話しな。特にライはまだ情報が足りないだろうしね」

「ごゆっくり。ライゼル様」

「！……ジェレミア卿、僕のことをその名で呼ぶのはやめていた  
だきたい」

「しかし、貴方様はブリタニアの……」

「僕はもう狂王ではない。ただのライだ」

「……わかりました。ライ様申し訳ありません」

「様もいいんだけど……まあいいか」

「そういう性分ですので……私めもお話したいことはございますが、それは後ほど。それでは、また」

そういつて二人は退出していった。今部屋にいるのは僕とカレンだけとなった。

いくら助けてもらったといっても、まだ彼らを信用はできない。

「……ひとまず基本事項を聞きたいんだけど、ここはどこだ？ 僕が眠ってからどれくらいたった？」

「ここは、ブリタニアの離宮だそうよ。なんでも、皇帝が密かに作った場所だそうで、誰も知らないみたい。

それと、貴方が眠ってから一ヶ月くらいがたった……日本はもう解放されてるし、皆も元気だった」

……ブリタニアの離宮。つまり、カレンが日本を捨てたってことか……僕のせいだ。僕のために、カレンは日本を、母国を捨ててしまったのか。今までの戦う理由だったものを。

「……ライ。私は何も後悔していないよ？ むしろ、貴方が目をさまして本当に嬉しく思っている。

私はずっと不安だった。怖かった。私はもう、貴方と一緒にじゃなきゃ嫌だ……お願いだから、もうどこにも行かないで。もう消えないうで。私を一人にしないで……そのためなら私はなんでもするから……」

「カレン……ごめんね。ありがとうね。僕を覚えていてくれて」

「ライ……好き。私は、貴方のことを愛してる」

「！……ありがとう、カレン。僕も、君のことが好きだ。誰よりも、君だけが」

「うん！」

……その後、僕は打ち明けた。

僕の過去を、僕もギアス所有者だということを。そしてスザクにギアスをかけたこと。ルルーシュが僕にギアスをかけたことも……

「……ライは何も悪くないわ。家族を守るために戦って、そしてこの時代でも私達と一緒に戦った。」

スザクのことだっけって組織のためにやったことで、現状を考えれば間違っていないかった。そうでなければ、日本だってまだ解放されてなんていなかった。悪いのは、現状を受け入れなかった、わかるうとしなかったルルーシュよ」

過去を話しても、ギアスを所持していると知っても、スザクにギアスをかけたことを話しても、カレンはそれでも僕を信じてくれた。

本当にカレンは優しい。普通の人間なら、僕を嫌悪し拒絶するだ



るつじ。

それなのに彼女は許した。それどころか、受け入れてくれた。罪深い僕を……

「私、ルルーシュが許せない。ギアスキャンセラーがなければ、ただ死を待つだけだったのに、そんな状態にライを、仲間を陥れるなんて……！」

「カレン。君が僕を思ってくれるように、彼も友達が大切なんだよ」

「それでも、許せない。ルルーシュは絶対に……！」

「カレン」

「！」

静かにカレンを引き寄せて、彼女の頭を撫でた。

こうしたのも、全て僕の行動のせいなんだ。彼女に憎しみを持たせてしまったのも、全て僕のせいだ……

「カレンごめんね。もう、どこにも行かないから……君の背中が僕を守るから」

「うん！ うん！」

カレンの頬に右手を当て、彼女の顔を自分の顔へと引き寄せせる。

「ん……」

「……っ」

口付けは一瞬だった。だけど、カレンの頬は彼女の髪の毛のよう  
に、真赤に染まっている。

僕も多分そうなってると思う。勢いでしてしまったけれど、これ  
がはじめてのことだった。

「一緒に行こう。どこまでも、二人で」

「うん。ライと一緒になら、私はどこにでも行く。だから、もうどこ  
にも行かないで」

「ああ、約束する。僕達はいつまでも、ずっと一緒だ」

これから歩むのは今まで以上に修羅の道。



一ヶ月ほど前、カレンが作戦途中で突然命令を無視し戦線離脱。紅蓮と共に姿を消した。

そして病室で寝ていたはずのライも姿を消し、さらにあいつの愛機、月下までなくなっていた。

かつて騎士団の双壁と呼ばれたあいつらが突然いなくなり、今でもその行方がわからない……一体、あいつらはどこに行ったんだ？

「いや……全然だ」

「そうか。私も彼らのことは心配している。情報が入り次第、連絡を」

「ああ、わかった……「大変だ！ゼロ！」！玉城？」

「玉城か……何があった？」

「それがよ、全世界に向けてブリタニア皇帝の演説が始まるそうだし！」

「……ブリタニアがついに本格的に動くのか……わかった。騎士団幹部を作戦室に集める！」

「あ、ああ。今から連絡する」



新たな皇族……今まで表舞台に出てこなかった人間をこの時期に国際発表で？

まさかその人間をEUか日本の舞台の総司令にでも祭り上げるとも言いつつもりか？

……ばかばかしい。戦場を知らずに、平和に過ごしてきた皇族にその任務が務まるわけがない。

『さあ、入って来い。みなの前に、その姿を示せ！』

皇帝の発言とともに後方の扉が開く。

誰もが新たな皇族、それも最上位の権力をもつ人間を見ようと振り返る。

だが、扉から入ってきたのは……

「……え？」

「嘘……」

「まさか……」

なぜ……なぜお前達か？ なぜそこにいる！？

『ライ・エル・ブリタニア。ただ今参りました』

見間違えるわけがない。ライが、カレンとジャレミアを引き連れて謁見の間に入ってきた。

『紹介しよう。新たな皇族ライ。この者の王位継承権は三位！今は亡きクロヴィスの地位と権限を与える！』

「な!？」

「ライが皇族!? おまけに三位!？」

「どういふことだよ!」

幹部の間に動揺が広がる……当たり前だ！俺とて、信じられない。今にも叫んでしまいそうだ。

なんであいつらが……いや、その前になぜライが目覚めている！ギアスが解けたのか!? そんなことが……！

『そして傍にたっっておるのはこやつを選任騎士、カレン・シュタツトフェルト！』

並びに親衛隊隊長のジェレミア・ゴットバルト！』

「カレンまで！？？」

「おまけに、紅月ではなくブリタニアの性を！？」

「それに、親衛隊長ってあのオレンジじゃないか！」

意味がわからない……なぜ、なぜ、なぜ！？

ライ、カレン、ジェレミア。三人の行方不明者が突然姿を現したと思っただけの状態。一体、何がどうなっている！？

47

『この者達には、先日我が領土から独立した合衆国日本の掃討を命ずる……』

「「「な！？」」」

『謹んでお受けします。陛下』



ライが勅命を受けた……？　ライとカレンが、ここに攻めてくる！？　敵として、俺たちを討ちにくるだど！？

あいつらが、本当にブリタニアについたというのか！？

映像は途切れた。ここで国際発表は終了だというのだろう。

「ど、どういうことだよ！？　なんであいつらが……」

「落ち着け玉城！」

「なんで、カレンが……」

「ライ君まで……一体どういうことだ？」

「……ひとまず今日は解散する。まだあれが本当にライやカレンだという確信はない。各々、戦闘準備だけは怠るな！」

「あ、おいゼロー！」

幹部の制止を無視して部屋から退室した。

……俺だつて信じたくない！　だが、あれは間違いなくライとカレンだった。

つまり、俺たちは今まで俺たちを守ってくれた双壁と戦わなければならぬんだから……



「……でも、ごめんね。これで君まで日本と戦うことになった。扇さん達もいるのに」

「最初から覚悟はしていたわ。貴方がいれば、私は大丈夫。あなたさえいれば、それでいい」

「ありがとう、カレン」

「……殿下、お楽しみの最中もうしわけありません」

「失礼します、ライ殿下」

「ん？ 貴方はたしか……」

部屋の中に、白衣に身を包んだ科学者のような男と、その助手のような女性が入ってきていた。

確か、以前スザクが所属していた……

「はい、殿下たちのナイトメアの整備等を担当していますロイド・アスプルンドといいます。どうぞよろしく」

「ロイドさん、殿下に失礼でしょ！」

「え？ どうして？」

……噂で聞いたとおりだな。身分を特に気にすることなく、自己を貫くマッドサイエンティスト。

しかしながら、ランスロットなど数多くの兵器を作り出した天才科学者か……

「いえ、構いませんよセシルさん」

「え？ どうして私の名前を……」

「セシル・クルーミー。上司のロイド伯爵の補佐をしながらも、自身もフロントユニットを考案するなど、類まれなる才能を発揮する優秀な補佐官と聞いています」

「い、いえ、それほどでは……」

「謙遜する必要はありませんよ……噂で聞いたとおり貴方は美しい方だ」

「で、殿下!？」

「本当ですよ。そこらの美女にも劣らな……E!？」

「……ライ?」

……ッ！いきなりカレンが足を思いっきり踏みつけてきた。なぜ！？

「ライ、余計な話はそこまでで……それでロイド伯爵、話とは？」

「はい、殿下たちのナイトメアのことです」

「……ど、どうなっている？」

「月下も紅蓮もフロートの取り付けは完了していますし、頼まれた武装も完成しています。MVSもちゃんと取り付けていますので」

「そうか……」

「ただ、僕も気になってるんですけどね。なんで殿下たちが騎士団のナイトメアを所持していたのかを。強奪したとか聞きましたけど……」

「……ですよね。普通信じるわけないか。」

まあ、一応姿かたちも変えてもらって戦場ではわからないようにしたけれど、整備していた人間の目はごまかせない。特に月下は僕にしか動かせないピーキーな機体だし……

「殿下が今まで何をしてきたかも知りたいですし、少し調べさせてもらっても……」

「死にたいのか？ ロイドよ」

「！ あゝごめんなさい、ごめんなさい！」

「ジェレミア卿！」

「まったく……殿下、このジェレミア・ゴットバルト。ただ今親衛隊候補生の選抜より、帰還しました」

「ああ、ご苦労だった」

親衛隊のことはジェレミア卿に一任していた。この一ヶ月ほど彼と過ごし、彼のブリタニア、そして皇族への忠誠は本物であり、僕に対しても忠誠を誓っていると判断したからだ。

ジェレミア卿の方が軍の情報にも詳しいし、何より軍のものと親しい。

「それで、優秀な人材はいましたか？」

「特に目立ったのは……私のかつての同志の妹、マリーカ・ソレイシイでしょうか」

ジェレミアが書類を提示した。

マリーカ・ソレイシイ

士官候補生の少女。陸戦操機科で最優秀の成績。

……兄、キューエル・ソレイシイはナリタの戦いで戦死。

「問題はないな。実戦経験こそ少ないが、能力は申し分ない。この調子で頼む」

「はっ！」

人材も揃ってきた。機体も最終調整が済めばいつでも出撃できる。

皇帝の命令では、一ヶ月以内に日本に攻め込めということ。それ







#### 第四話 反逆の双壁（後書き）

作「完全に分かれました！ ジエレミアやロイド・セシル、さらにはマリーカといった面々がライに協力。本名は『ライゼル・エス・ブリタニア』なんですが、混乱を避けるために文字をいじって『ライ・エル・ブリタニア』になりました」

ル「……本当に全面戦争をするつもりか？」

C「本気で戦わせるとはな……」

作「次回は騎士団側のお話です。ルルーシュたちはどう動くのか……」

## 第五話 惑う者達

――合衆国日本 黒の騎士団――

「どうだディートハルト。ブリタニアの動きは？」

騎士団の作戦司令室。騎士団も日本防衛線に向けて軍備を充実させていた。

ここには在籍する幹部の代表が揃っている。メンバーはゼロ、扇、藤堂、ディートハルト。今はゼロがディートハルトの報告を受けていた。

「今のところ、軍備の調整中のようなです。少なくとも、攻め込んできたとしても五日はかかるかと」

「わかった…… 暁や残月、なにより斑鳩の調整は？」

「暁、並びに残月は最終調整を残すのみ。しかしながら斑鳩の方は…… 厳しいかと、ラクシャータの言葉です」

「……そうか」

新型ナイトメア、暁と残月の補強は最低限のこと。すでにブリタニアはライヤカレン、ジャレミアといった主力部隊を中心にフロートユニットを搭載した機体が出回っているという。

日本防衛戦においても、航空戦力で劣らないためにこちらも空で戦える戦力が必要だった。

少しでも戦力が欲しい中、斑鳩が出撃できないのは痛すぎる。

「……ならば、今は斑鳩を後回しにするよう伝える。それよりも、暁を大量に生産したほうがこちらも助かる」

「わかりました」

「……なあ、ゼロ。本当に、本当にライとカレンはブリタニアにいたのか？」

「……事実だ。カレンのシュタットフェルト家も、ライの後継人となった。あの二人は……もはや敵だ！」

「……ッ！」

扇は今だ信じられないのか、ゼロに二人のことを聞いたが……聞くだけ無駄だった。

すでにあの二人はブリタニアの軍門に下ったと、団員は認識していた。

あの二人がブリタニアに加わったことは騎士団にも大きく影響した。

騎士団員の中に、ブリタニア軍に加わる離反者が出てきたのである。若いながらかつて双壁と呼ばれ、隊長に任命されるほどの実力を持ち、団員達の信頼を得た二人。その二人を慕うものは少なくなかった。それほど、彼らの存在は騎士団の中で大きかったのである。

「だがゼロよ。実際のところ我らが不利だということとは変わらない。離反者が現れ、騎士団の戦力は低下している。地力で劣っている我らには、これ以上の戦力の低下は許されない」

「わかっている！ デイトハルト、新幹部の選出はどうなっている！？」

「オペレーターは三人確保しました……しかしながら、ナイトメアのパイロットは今だこれといった人材は見つかりません」

日本が解放され、新たに防衛の軍として人材を集めようと試みたが、これと言った実力者は現れなかった。最も、ライヤカレンの抜けた穴を埋める者などいるはずがないのだが。

今の騎士団の戦力と呼べるのは藤堂、四聖剣、ルルーシュ、スザクくらいである。

「……中華連邦との外交はどうなっている？ 神楽耶様は？」

「現在、天子と掛け合っているところですが……報告によると、上層部を憎んでいる派閥があるようで、彼らとも話を伺っているそうです」

「引き続き、連絡を頼む」

神楽耶の悲しみも大変なものだった。やっと従兄弟のスザクが目を覚ましたと思ったら、今度は同じく血のつながりがあり、頼りにしていたライとパートナーのカレンがブリタニアに。思わず、スザクの腕の中で泣いていた。

だが、それでも彼女は日本の代表であるという矜持を捨てなかった。今も日本の代表として中国と掛け合っている。愛する祖国を守るために。

きつと、ライ達も目を覚ますとひたすらに信じて……

「藤堂、お前は騎士団の訓練を頼む。扇、デートハルト。何か動きがあればすぐに伝えてくれ。スザクには、ランスロットの調整を済ませておくよう伝えてくれ」

「了解！」

ゼロは幹部達に通達すると、自室に戻っていった。自室にはC・Cがピザを食べて待っていた。

「ご苦労なことだなルルーシュ」

「……黙れピザ女」

「そう言うな。元はと言えば、お前が引き起こしたことだろう？ お前がライにギアスをかけたことで、この悲劇が始まった」

「違う！ ライがスザクにギアスをかけなければこうはならなかった！

俺もナナリーも……スザクも、ライもカレンも！ 今はきっと一緒にこの国でいられた！」

「本当にそうか？」

「何だと……？」

C・Cの言葉に苛立ちを隠せないルルーシュ。

しかしそんなルルーシュを無視し、C・Cは言葉を続ける。

「ライのやったことは別に戦略的に間違っていない。現に今まで騎士団はあの白兜に何度も苦しめられた。その白兜を行政特区日本の計画をつぶす形で味方に取り込んだ。」

もしライがいなかったら……騎士団は今頃なかったかもしれないぞ？ お前とて、どうなっていたかわからない」

「それは……結果論だ！」

「何を今更……大事なのは過程ではなく、結果。そう言ったのはお前だろうか？」

「……！」

「確かにライのやったことは正しいことではないかもしれない。だが、お前は友情にとらわれたことで……スザクという最大の戦力を手に入れ、ライとカレンという最高の戦力を失った。果たしてどうするのか？」

「……お前は知っていたのか！？ ライが目を覚ましていたことを！ あいつらがブリタニアに行ったことを！」

「ああ、知っていた」

C・Cはさも当然のように答えるが、その様子がルルーシユの



怒りをさらに引き立てた。

ルルーシュは思わず彼女の胸倉をつかむ。

「なぜもつと早く言わなかった!? それさえわかっていたら、まだ手のうちようはあった!」

「嘘をつくな。一体お前に何ができた? ただ絶望に落ちるだけだろ……今更女々しいぞルルーシュ。」

もつこうなつたら……あの二人を殺すしかない」

「殺す……だと?」

「少なくともカレンはお前のことを殺しにくるだろうな。あいつはおそらくお前がライにギアスをかけたことを知った。そしてあいつは、ライのためならお前であろうと迷うことなく殺すだろう」

「……」

「ライも同じだ。あいつはカレンを一人にさせない。カレンが修羅の道を歩むのなら、あいつは迷うことなく共に進む……お前が殺さなければ、お前が殺されると言っている」

C・Cの言っていることは正しい。カレンはV・Vとライの話聞き、真実を知った。そしてその上でライを受け入れ、ライにギアスをかけたルルーシュを恨んでいる。

ライモ、一度カレンに悲しい思いをさせてしまった上に彼女をブリタニアに取り込ませてしまったことに深く負い目を感じている。カレンを守るためなら彼は仲間であるうとも戦うことに迷いを感じない。

二人はすでに、戦う覚悟を決めていた。騎士団と相反する覚悟ができていた。

「私を失望させるなよルルーシュ。私はお前が生きていればそれでいい」

「……」

ルルーシュは何一つ返事をする事ができなかった。今だ何が正しかったのか……間違っていたのかを整理できていなかった。

部屋にはただ、C・Cがピザを食べる音だけが広がっていった。

- - -  
- - -  
- - -  
- - -

「ライ……どうしてなんだ？ どうして君がブリタニアに……？」

スザクは自分に与えられた個室で一人呟いていた。今部屋にはスザクしかいないため、その声を聞いている者はいない。

彼の力のない声は自室に広がり、誰にも届くことなく消えていく。

「どうして、僕に進む道を教えてくれた君が……どうして僕達の道に君はいないんだ……」

ライがかけたギアスは『黒の騎士団に加わり、ゼロの進む道を切り開け！』というもの。

たとえライが、ギアスをかけたライがブリタニアに加わろうともその効果は続く。

ゆえにスザクは迷っていた。騎士団に入ったのは間違いだったのではないかと。

「やっぱり、僕が間違っていたのか……？ 僕はユフィと……ッ！」

違う！ ゼロが正しいんだ！  
ゼロの道が僕の道。そして、ゼロの道を切り開くのが僕の役目。  
だから、ゼロの道を邪魔するなら……ライでも、カレンでも……  
ユフィでも！ 僕は……！！！」

スザクの疑問もライのギアスによって打ち消されていく。王の力は彼のささいな迷いも許さなかった。

白き騎士は光を失った瞳で、友を……大切な者達と戦うことを決意していた。

「スザク君、今大丈夫か？」

「！ 藤堂さん！ 大丈夫です」

「失礼する」

スザクの許可を得て、藤堂が部屋に入ってくる。

師弟だった間柄、藤堂はスザク加入のことをとても喜んでいた。騎士団幹部の中で、スザクに何の偏見もなく接する数少ない一人である。

「調子はどうだ？」

「大丈夫です。命令があれば、いつでも出撃できます」

「フツ、それは頼もしいな……ブリタニアがおそらくあと一週間たらずで攻め込んでくる。それまでにランスロットの調整をしておけとのことだ」

「わかりました」

本来ならこうして言葉を交わすこともなかっただろう。

以前は戦場で、ナイトメアの通信越しに話すだけだった。それが今、こうして仲間通しで話し合える。藤堂にとって、これほど嬉しいことはなかった。

「……君は大丈夫か？ ライ君や紅月君とは、クラスメイトだったんだろう？」

「関係ありません。彼らがゼロの道の妨げとなるのなら、僕が彼らを討ちます。ゼロの道を切り開くのは自分です！」

「……そうか。いや、それならいい。期待しているぞ」

「はい！」

(…………どうなっている？ 頼もしくはある…………だが、何かがおかしい。あれほどゼロを否定していたスザク君が、今となってはゼロを肯定するどころかゼロを守るほどになった。一体彼に…………いや、彼らに何があったんだ？)

スザクやライ達の変貌に疑問を感じつつ、藤堂はその疑問を心に留めた。

変わったのも個人の理由がある。その理由を自分が聞いても仕方がない。

藤堂は何も聞かずに、自分の任務を全うするため部屋を後にした。

## 第五話 惑う者達（後書き）

作「スザクが心配だ……」

ル「というか、今のスザクってギアスが二重にかかっているんだよな？」

作「ライとルルーシュのギアスにかかっている……こんなやつ初めてですよ。次回は再びライ達視点に戻します」

## 設定

みなさんお久しぶりです。starです。今日は相反の舞台設定についてお話していこうと思います。

「お久しぶりですライです。僕も参加させていただきます」

番外編から始まったこの物語、ゆえに設定などがいろいろ付け足したりする部分がけっこうあるので、ここで紹介しておこうと思います。

「まさか、連載になるとは思わなかっただろうね……」

ええ、感想でもそういったお言葉をいただきました。

……では早速、相反の設定について話しておきたいんですけど、まずは日本のことについて話しておきます。

「……原作とは違い、行政特区は起こらず、日本は解放された……」

そう。原作と違うのは、ライ君も言ったとおりこの時点で日本が



解放されたということ。

また、ブラックリベリオンの敗戦がなかったので、キョウト六家のメンバーが全員生き残っているということですよ。

「桐原さんたちか。経済面でも大きな役割を果たしていたが……」

戦前の政治にも関わっていた人たちですからね。解放後、日本の政治に大きく貢献しています。

今も日本の代表として、神楽耶が参謀役の桐原と数名の団員を連れて中華連邦に交渉しています。

「神楽耶様か……スザクが騎士団に入ったから、まだ良かったとも思えるけど、複雑だな。兄のように僕をしたってくれたのに……」

宿反では実際に義理の妹ですしね（笑）

それと黒の騎士団のことなんですけど、二期では日本が解放された後に何人か幹部が辞めています。相反では誰一人やめていません。なにしろブリタニアが健在ですし。

そしてカレンが務めていた零番隊隊長にはスザクがつかまりました。

「スザク……親衛隊にスザクか。零番隊はゼロの直属の部隊だし……厄介だな」

そして……騎士団についても一つ。  
かつてライが務めていた『戦闘隊長』という職は完全になくなりました。ゼロの決定だったんですが、ライが騎士団を裏切ったと団員達に示すためです。

「……」

……まあ、騎士団のことはこの辺で。次は皆さんが気になっている……かもしれないアッシュフォード学園について。

「そういえば、学園の皆は？ 生徒会のメンバーは？」

学園理事長・ルーベンは、一時ブリタニアへの撤退も考えたのですが、結局日本にとどまりました。ルルーシュ、ナナリーの両名を保護するために。生徒会のメンバーも学園にいます。

ただ、やはりブリタニアの生徒の中で本国に帰るといふ人が増えたので、生徒数の調整・日本との友好関係を築くため、日本人の生徒の受け入れを積極的に行っています……それでも日本人の入学は少ないですけど。

「なにしろ戦争してた相手だからな。そんなすぐには無理だろう……でも、生徒会のみんなが無事だったなら何よりだ」

日本についてはこんな感じですよ。次はブリタニアについて……

「まさに、今の僕達だな」

ええ……第三位王位継承者になり、選任騎士にカレン、新鋭隊長にジャレミアとなかなか濃いメンバーが揃ってますからね。それで、まずはライの部隊について紹介していこうと思います。

74

「いろいろ複雑なところがあるんだけど。ロイドさんたちまでいるし」

ロイド、そしてセシルはシュナイゼルの許可ももらい、特派は正式にライの専属開発チーム『キャメロット』となりました。今はライとカレンたちの専用機の強化。それと新量産期の製造に取り組んでいます。

「……最初は酷かった。シミュレータをいろいろやらされて……」

……まあ、シミュレータのことは後ほど語るうと思います。なにしろ、今まで表舞台に出なかった皇族が、ラクシャータの月下に（しかもかなりピーキーな機体）乗れるわけないですからね。ロイドも気になったんですよ。

「まあ、月下や紅蓮が強化されるならいいけどさ……あとは、ジェレミア郷やマリーカの機体か」

ジェレミアの機体は皆さんおなじみのサザーランド・ジークです。ただし輻射障壁発生装置はなく、ジークフリートのブレイズルミナス、電磁装甲を装備。

マリーカの機体はヴィンセント……まあ、つまりは原作と同じです。色も含めて。

「あと、皆さんが気になっているのはおそらくコーネリアとユーフエミアのことかな？」

この二人は特に皇帝からの御咎めはありませんでした。（シャル

ルにとつて、日本を失つたことよりもライを手に入れたことの方が大きかった)

ただし、コーネリアは自分から離宮に下がっていきました。ユーフェミアも同じく。ギルフォードたちも一緒です。

「なにしろ数々の国を植民地にし、『ブリタニアの魔女』と呼ばれた人が、反ブリタニア勢力に敗れたからね。やっぱり思うところがあつたんだろう……ユーフェミアはスザクのこともあるし……」

それとコーネリアのことなんですが、一度ライと会い、十分に戦える男と判断し、日本征服戦にむけてダールトンをライの部隊に派遣しました。

彼はかつての日本制圧にも活躍し、軍略にも長けた將軍。ライにも忠誠を誓い、ライの部隊の訓練・他国の偵察を行っています。

「……なんか、本当に僕の部隊って濃いメンバーが揃ってないか？」

纏めると……

総司令

ライ

選任騎士

カレン

親衛隊隊長　ジャレミア  
参謀・軍事総責任者　ダールトン  
特務隊隊長　マリーカ  
技術開発担当　ロイド  
オペレーター　セシル

……色んなところから集めたな、おい。

「それ作ったの君だから」

ここまでなるとは思わなかった……あ、ダールトンの機体はヴィンセント。ギルフォードが乗っていた機体です。他の者達には、ヴィンセント・ウオード（量産機）やグロースター、サザーランドが配備されています。

……とまあ、こんな感じですよ。これで今回の説明はお終いです。

「皆さんどうでしたか？　感想や疑問はいつでもお待ちしていますのでよろしくお願いします」

では、また次回！

## 第六話（前編）

### ライの実力

「……セシルさん。ロイドさんはいますか？」

「！ライ殿下！ ようこそお越しくございました。ロイドさんは……」

「ここにいますよ殿下。お久しぶりですね」

「ええ。それで、今日を僕を呼んだ理由は？」

「ライのナイトメアになにか問題でも？」

今日、僕はロイドさんにナイトメアのことと呼ばれ、研究所に来ていた。当然のことながらカレンも護衛として同行している。

ロイドさん達にナイトメアの整備を頼んでまだ二日しかたっていないのだが……

「いえいえ、ナイトメアのことと言えばそうなんですが……どちらかと言いますと殿下自身のことです……」

「僕のこと？」

「はい。正直に言いますと、殿下のあの機体は……とてもではありません



ませんが初軍務の殿下に乗られる機体ではないと言いますか……」

「……なるほど。つまり、僕では役不足だとそう言いたいわけですか」

「！ 違います殿下！ 今回のこの機体……『月下』は、第七世代に相当するナイトメアの上に、出力傾向が他のナイトメアに比べピーキーで、普通のパイロットには扱いがたい代物なんです。」

しかもこの機体には輻射波動という特殊な武器が装備されており、軍人でもこれを完全に扱えそうなものはいません。ロイドさんの言い方が悪いだけで、決して殿下を侮っているわけではありません！」

「いや、別に責めているわけではないですよ。そのことは僕も承知の上ですから」

セシルさんが必死に弁解をしてくるので一応誤解を解いておく。

彼女も僕が皇族ということで、色々気遣いをかけてしまっているな

……上司がロイドさんだし。

そんなに気を使わなくていいと言ったんだが、彼女といい、ジェレミア卿といい生真面目な人が多い。

「それで？ 僕を呼んだのはそれを言うためだけではないんでしょ

っ？」

「ええ。殿下にはナイトメアのシミュレータやっていたかどうかと思  
います」

「シミュレータ？ 実戦ではなくて？」

「もしものことがあつたら大変ですからね」。

それに、殿下は一度サザードランドを乗りこなして見せたじゃない  
ですか」

「……それもそうか」

一度、ロイドさんの要望でサザードランドに乗った。もちろん、僕  
がパイロットとして任せられるかのテストだったのだが、文句なし  
の高得点をたたき出した。

Gにも対応しているし、実戦でも普通の機体なら大丈夫と判断さ  
れたわけだ。

「すでに月下のデータを入力しています」

「シミュレータをはいえ、並の力では動かせませんか？」

「わかっています。早速はじめましょうか」



物の月下のようなスピードをしつかりだしてくれる。ディスプレイ上の点がみるみる近づいてくる。

「敵部隊、まもなく交戦距離」

モニターに三騎のナイトメアが見えた……『無頼』だ。

スピードを落とすことなく正面にむけハンドガンを放つ。

敵は三方向に散らばった。

弾は当たらなかったが、もともと当てるつもりで撃ったわけじゃない。先に撃たれる前に、敵を散らすことが目的だ。

一番近い機体に狙いを定める。速度はそのまま維持し、すれ違わずに制動刀で斬りつける。無頼は一撃で沈んだ。

斬撃と同時に急旋回し、残った二騎のうち片方を正面にとらえる。ハンドガンで即時撃破。

最後の一騎が側方から撃ってくるが、距離があるので楽に回避できる……いや、僕と月下なら、たとえ距離がなくても回避できる。

最後の一騎がアサルトライフルを連射しながら突っ込んでくる。最小限の動きでこれをすべてかわし、距離が詰まったところでハンドガンを撃ち返す。

これで最後の一機も戦闘不能になった。

「敵部隊の全滅を確認」

「すごいね〜。接触から17秒で三騎を撃破……本当に戦場に出たことないんですか？」

「ライならこの程度、朝飯前よ」

外では三人が会話しているのが聞こえる。カレンも誇らしげに話すが……あまりそういうことを言うと、直のこと疑問をもつだろうから、あまり言わないで欲しいんだけどな。

「全弾ギリギリでかわしています。それも、操作の回数がペダルと操縦桿そうじゅうかんに対して、1秒間に最高12回もの入力をしています。それも機械のような正確さで」

「もし相手のナイトメアに人間が乗っていたら、亡霊と戦っているんじゃないかって思うだろうね。」

真正面でほとんど動いていないように見える殿下の機体に、弾があたらずすり抜けていくんだから。

殿下は本当におもしろいですね〜。これならすごく良いデータがとれそうですよ、んふふ〜」



ライは『いけるところまで』と言ったが、その『いけるところまで』というのがくせものだった。

「敵ナイトメアを撃破。敵の残存戦力、『サザーランド』8」

「ふふふ、すごいですね殿下。もう6騎倒しちゃったよ?」

「敵のさらなる増援部隊を確認。編成、月下4騎。2方面より急速接近中」

「ちょ、ちょっと待って! なんなの!? このシミュレータのプログラムは?」

「いやー、どこまでいけるかな? と思ひまして。倒せば倒すほどでくるようになってるんですよ」

ロイドの性格上、今回のシミュレータは敵を倒せば倒すほど、どんどん敵が強くなっていくという、過酷なプログラムが組み立てられていた。しかも、その内容はただ単にレベルだけが問題ではない。

「月下4騎、交戦エリアに到達。特派月下、右肩に被弾。損傷は軽微」

「あー……すごいすごい。見ました？今の動き。また1騎……いや、2機倒しましたよ」

「敵のさらなる増援部隊を発見。編成……月下指揮官機！？交戦エリアに接近中」

「ロイドさん！これってまさか、黒の騎士団の戦力を……！？」

「輻射波動、残弾ゼロ。飛燕爪牙、破壊。エネルギーファイラー22%。殿下……！」

.....  
.....  
.....  
.....

「いやー、すごかったですね。しかし殿下、汗だくですよ」

「……あれをやったら、汗だくにもなりますよ」

「あの設定はやりすぎです、ロイドさんー！」



やっぱりロイドさんの組んだプログラムだったか……いや、途中からそんな気はしていたけど。

あんなプログラムをロイドさん以外の方が組み込んだなんて考えたくないし。

「でも結局、エナジーファイラーがなくなるまで戦い続けたんだから、いいんじゃないの？」

「ライ、大丈夫だった？ あんなに酷いシミュレータで」

本当にひどかった。途中、ガヴェインやランスロットまで現れたし……まあ、ランスロットが到着する前にエナジー切れになったわけだけど……

「でも、あそこまで出す必要あったの!？」

「まあまあ、シュタットフェルト卿。実際ガヴェインは戦闘には参加していませんし……」

「それでも、空中からずっと狙ってたじゃない!」

そう。ガヴェインは戦闘にこそ参加しなかった。しかし、隙あれ





「まずはこのライフルを試してみてください。基本はアサルトライフルと同じなんですけど、モード切り替えで長距離からの狙撃もできます」

なるほど、通常モードは従来のアサルトライフルと変わらないが、狙撃モードにすると銃身が伸びるのか。

「敵を2機出すので、試しに撃つてみてください」

「了解」

レーダー画面にふたつの光点が現れた。

ここからは距離が遠く、正面モニターにはナイトメアの影も形も見えない。

こちらから接近するか、それとも……

「ロイドさん、この距離からでも狙えますか？」

「射程内です。モードを切り替えてみてください」

狙撃モードに切り替えると、モニターにターゲットサイトが表示される。

1 騎の無頼にロックをかけて、トリガーを引く。

無頼が火を吹いて倒れた。

すぐ残った無頼に狙いを定めるが、違和感を覚える。

「ああ、狙撃モードでは速射はできません。通常モードに切り替えてください」

すぐに切り替える。

アサルトライフルと同じように使える。一回の速射で、無頼を撃破した。

「どうでした、殿下？」

「切り替えを使いこなせば、かなり助かる……ただ、エネルギーファイラーの減りがやけに多いのが気になるんですが……」

ゲージを見ると、エネルギーが余分に減っている。

「狙撃モードの時はファクトスフィアを開きっぱなしにして、なおかつ感度を増幅させますから……そのファクトスフィアも新パーツなんですけどね。あとライフルそのものも、狙撃モードでは通常モードの1.5倍のエネルギーを消費します」

「だから速射ができないし、ロックに時間がかかるんですね」

「はい。使いすぎますと活動時間がどんどん短くなりますからね……殿下にはつけないほうがいいかもしれませんね。総大将ですしエナジー切れなんて一番危険ですからね……それじゃあ、次のパーツをシミュレータにロードしましょう」

ロイドさんは楽しそうな声で話しかけてくる。そのせいか、僕もなんとなくつぎのパーツが楽しみになってきた。

「これはショート・ソードなんですが……」

「……妙に柄つかの部分長いですね」

「いいところに気がつきますねー。それ、2本つなげても使えるん

です。いろんな使い方ができますよ。つねげて使ったり、分離して両手に一本ずつ持ってもいいですし、もちろん一本だけ使ってもいい。アタッチメントをつけてぶら下げておきますね」

なるほど。これは先ほどとは打って変わって近接戦闘用の武装か。これも期待できそうだ。

「じゃあ、敵機を出すので使ってみてください」

至近距離に三騎の無頼が現れた。

ショートソードを片手に持ち、無頼が振り下ろしてきたトンファを止めようとすると……特に手ごたえもなく、トンファがスバツと切断された。

そのままの勢いで無頼の肩口から胴にかけて、ソードを走らせる。無頼はあっさりと切断された。

「……すごい切れ味なんですけど。一撃で無頼が……制動刀と同等の、いやそれ以上か？」

「大きさは違いますけど、機構はランスロットと同じ、メーザー・

バイブレーション・ソードですからね」

「MVSですか。刃の部分が高周波振動してるっていう……」

「……殿下。本当にナイトメアのことをよく知ってるんですね。もうそこらへんの騎士が見たら自信喪失しちゃいますよ？」

……まあ、本当は戦っていたし。

苦笑したいところだったが、残った二機の無頼が襲いかかってくる。

今度は二本のソードをつないで一本にして、左の無頼に突きを入れ、引き抜きつつ反対側の刃を前に押し出し、右の無頼を腰からまっぴらつに斬りおとした。

「使い勝手はどうですか？ それ」

「いいですね。とくに複数のナイトメアと至近距離でもみ合いになったときには、かなり有効ですよ」

「なるほど。そのソードは凡庸性が高いですからね。量産も考えているんですよ……うん。いいデータがとれました……せつかくですから、前回のリベンジいきます？」



「リベンジ？」

「ええ。前はランスロットなどを相手に途中でエナジーが切れましたからね。藤堂などを相手に……やってみませんか？」

「……いいだろう。その挑戦受ける」

そう言われると、戦士である以上引き下がるわけにはいかない。今後のためにも良い勉強になる。

僕は再びシミュレータに挑んだ。

目の前には早速、四聖剣が揃っていた。

.....

.....二時間後.....

「何をやっているんですか！？」  
ロイドさんはともかく、ライ)

殿下)まで!!」「

「すみませんでした」

結局気がついたら二時間ぶっ通しでシミュレータを行っていた。完全に勝つまでやろうとしていたら、戻ってきたカレンとセシルさんに止められて……現在、二人で正座中です。女性は怒らせると怖いと初めて知りました。

「殿下も気をつけてください！ ロイドさんはほっとくと何時間でも騎乗させようと思いますので、殿下自身の判断で降りてください」

「そうよ！ ライ、本当なら貴方がすぐに降りなきゃいけないのよ！  
？ パイロットは体調管理も大切なんだから」

「うん。ごめんなさい」

……今まで皇族が自分の騎士に正座で謝るといった例があっただろうか？ 今、ここではありえない光景が広がっている。

十分ほど説教が続き、やっと僕とロイドさんは解放された……足が痛い!!

ひとまず僕はロイドさんとセシルさんにナイトメアのことを任せ、離宮にカレンと戻って行った。

「ライ、お願い。本当に無茶はしないで……」

「? カレン?」

「言ったでしょ。あなたは私が守るって。あなたが一人で全てを背負う必要なんてないんだから。」

私も戦うんだから……もう、無茶なことはしないで!」

知らぬうちに、カレンにつらい思いをさせてしまったようだ。

確かに他のものからすれば、僕は一人で戦う戦士のように見えただろう。騎士団の戦力を相手に一人で相手をしていたんだから。

そんなことにも気付かないなんて、本当に馬鹿だ、僕は。

「うん、ごめんねカレン」

「一緒に戦いましょう。これからもずっと……」

カレンが僕の手を握り締めてきた。僕も彼女に答えるように力をこめた。

……そうだ。僕は一人じゃない。一人で戦っているんじゃない。頼もしい騎士が、パートナーが傍にいるんだから……

第六話（前編）

ライの実力（後書き）

作「投稿が遅れてすみません。次回はマリーカ、あるいはコーネリアとの出会いについて書きたいと思います」

ラ「……これはまた、なかなか難しい話を」

作「特にマリーカなんですよね。なにしろ、紅蓮によって兄・キュリエルを失っているから、そこをどうするか……」

**第六話（後編）**

**科学者の視点（前書き）**

皆さん2ヶ月の間、お待たせしました。

予定ではマリーカの話を投稿するはずだったのですが、その前に1話だけはさみます。

## 第六話（後編）

### 科学者の視点

時間は少し戻り、ライの専属開発チーム『カメラロット』の研究室。

ライとカレンが離宮へと戻ったあと、ロイドとセシルはライのナイトメアのデータの処理やシミュレータの後片付けを行っていた。

「ロイドさん、早くしてくださいよ。あとで殿下のところにお伺いしなければならぬんですから」

セシルがロイドへ呼びかける。

先ほどはその場の勢いに任せて何も考えずにどなってしまったセシルだったが、冷静になった今となっては先ほどの自分の行為がどれほど無礼であったかを気づき（カレンも一緒にどなっていたが）、そのお詫びと、データの作成に協力してくれたお礼にライの離宮を訪れようとしていた。

最もライ本人は全く気にしていないし、むしろありがたくさえ思っているのだが……生真面目な性格の彼女にはそんなことは通用し

ない。

「わかってるよ……まったく。自分だって殿下のデータを取れて喜んでいたくせに、僕の話は散々言ってくれちゃってさ……」

「……何か言いましたか？」

「いえ。何も言ってません」

ロイドが先ほど自分もセシルにどなられたことをボソツと非難するが、地獄耳でも持っているのだろうか？ セシルは恐ろしいほどの笑顔で 恐ろしい笑顔でロイドに聞き返す。

さすがのロイドもこれにはたまらず反論するための言葉が出てこない。あるのは自分の行動に対する否定の言葉のみ。

「……ねえ。それよりも君に聞きたいんだけど……君はあの人ライ殿下のことをどう思ってる？」



「いきなり何ですか？ その質問の意図は？」

「ああいや、変な意味ではないんだ。ただ純粹に、君の意見を聞きたくてね」

ロイドが珍しくナイトメア以外のことでセシルに質問する。

ロイドは普段からナイトメアのこと以外には、たとえ人であろうともほとんど興味を示さない。上下関係や社会的タブーにも無頓着であり、非人間的であるような振舞いさえ目立つ。

その彼が、ライについて質問してきたのだ。不思議に思わないはずがない。

「……すばらしい方だと思いますよ。今まで公の場にさえ出てこなかったというのに、円満な人格を持って人当たりもいいですし。能力的に見ても……政治に通じ、ナイトメアの操縦や部隊の指揮にも長けていて、正直言って今まで私が見てきた人の中では、最も優秀な方だと思います」

セシルはここ数日でライと出会い、話した内容や見てきた内容、さらにはシミュレータの結果から客観的に述べる。確かにライは人格的にも、能力的にもブリタニアの中で見て　いや、世界的に見てもトップクラスの人間である。

「……そうか。君はそう思っただ。僕も確かにそう思っよ。

だけどね。僕は正直言ってライ殿下のことを……怖いと思ってるよ。」

「怖い……ですか？」

思わずセシルがロイドの言葉を反芻する。

先ほども言ったが、ライは人当たりがよく、また部下に対しても優しく接し、皇族としての奢りも見せず怖いという表現とはかけ離れた存在だとセシルは感じていた。

「うん。完璧すぎるということもそうなんだけどね……この間のシミュレーションを見て、そして今回のシミュレーションで確認した

んだ。

ライ殿下の、戦っている姿をね」

「……………ロイドさん。まさか、そのために今日のシミュレーションを行ったんですか!？」

「……………ねえ君。まさかとは思うけど、僕が本当にデータを取るためにだけに2時間も殿下を縛り付けたと思っているの?」

セシルの意外そうな言葉に、ロイドが不満そうに尋ねる。  
その顔から、ロイドが機嫌を損ねたような姿がうかがえる。

「い、いえ……………ただ、意外だったので……………」

「残念でした。データを取りたいのが半分、確認したいのが半分だよ」

……………もっとも、それもロイドの演技であったりしたのだが。

「……ロイド・ド・さくん？」

「ごめんなさい、冗談です。本当に確認したかっただけです。

……話を戻すよ。ほら、この前……殿下がシミュレーションで藤堂のナイトメアと戦ったの覚えてる？」

「はい。あの悪魔のようなシミュレーションですよね」

ロイドがセシルの鉄拳から逃れるため、話を変えて先ほどのシミュレーションについて述べる。

今ロイドたちが言っているのは、最初ライがシミュレーションに取り組んだときのプログラムのことだ。黒の騎士団の戦力との連戦につぐ連戦。まさに悪魔のようなプログラムだ。

……当然ながら、そのプログラムを組んだのはロイドである。

「あの時……殿下の機体はすでに無頼やサザーランド、そして四聖剣の連携攻撃の前に追い詰められていた。そこに追い討ちをかけるかのように現れた藤堂。常識的に考えれば正に絶望的な状況だよね。

味方もいないし、援軍も望めない。そんな時、殿下はどんな表情をしていたと思う？」

「……さあ？」

「殿下はね、あの時……笑ってたよ。藤堂が現れた瞬間、笑みが現れた」

「……笑ってたんですか？」

「うん。あの表情は……あの瞳は、戦場を知る者だけが纏うものだよ。思わず僕は鳥肌がたった」

それは正に、好敵手と出会った強者がするものであり、戦いを楽しむものであった。

ライは自分の危機さえも喜んで迎えうったのだ。スザクでさえ、そのようなことはしない。

「つまり……ブラッドリー卿のような方だと？」

「いや、それは違つよ」

「？」

セシルが問いかけるが、ロイドはそれを迷うことなく否定する。

ルキアーノ・ブラッドリー

帝国最強の騎士団『ナイトオブブラウズ』の一角、ナイトオブブテンを務めている男。

攻撃的な人間で、戦場での破壊と殺人を何より好む。

その凶暴性は味方にも向けられることもあり、撃墜寸前の味方艦を敵艦に向けて撃墜すると言う暴挙も平気で行ったりする為にブリタニア軍内でも嫌われている。

「だってブラッドリー卿とライ殿下では、タイプが完全に正反対だからね」

ロイドが語ることによると、いついづのことであった。

ルキアーノは自らの快樂を求めるがために、自ら望んで狂い戦場へと立ち始めた。

対照的にライは護る為に戦場を知り、その過程で勝負さえも好むようになったのではないかと。

結果的にそうなってしまったライと、最初からそれだけのために戦場に出るルキアーノ。

この二人が同じわけがなかった。

「だけど、だからこそ怖いんだ。ああいう強い人に限って……壊れやすいんだよ。

その肉体も、心も……互いの関係も。君も知っているでしょ」

「……ええ」

「最も、シュタットフェルト卿がいればその心配はなさそうなんだけど……僕が気になるのは、ライ殿下が、過去にすでにそういう経験があっただんじじゃないかって思うんだよね」

「過去に、ですか？」

「うん。なんとなくなんだけど、そう感じるんだ。

普段からあの人は……何かを失うことを恐れ過ぎているように思えるんだよ」

ロイドの想像は的中していた。

ライは常日頃から失うことを恐れている。記憶が戻ってからには常に。特に、ルルーシュによってギアスをかけられた後はいつそう強くなった。

再び大切な人を傷つけてしまうことを、失ってしまうことを……

「そしてそうになったら、もう止められない。何をするのかわからないんだ。僕が恐れているのは正にそれだよ」

「……そうだったんですか」

「ま、僕達がここで言っても何も起こらないんだけどね」

そう言って再びロイドは作業に戻っていった。  
飄々とした性格でつかみどころがない人間だが、人一倍人を見ている。



ある意味で、ロイドもライの数少ない理解者となっているのかもしれない。

第七話（前編）

主と騎士（前書き）

個人的にはマリーカは好きなキャラです。

というか、ギアスの次回作を書くとしたらマリーカがヒロインになるかもしれません。

## 第七話（前編）

### 主と騎士

ライがブリタニア皇帝によって与えられた離宮。

現在その場所に主たるライ、選任騎士であるカレン、親衛隊隊長を務めるジェレミアがいる。

そしてその場に、新たにライによって取り立てられた若い騎士が離宮へと訪れていた。

まだどこか幼さの残る顔立ち。

整えられた栗色の髪。

碧色の大きな瞳。

その体には昨日卒業したばかりの士官学校の制服を身に着けている。

その騎士はライたちのいる部屋へと入ると、ライの眼前で膝を折った。

「ライ殿下。お初にお目にかかります。私はマリーカ・ソレイシイと申します。この度は私のような者を選出していただき、恐悦至極に存じます。

この命尽きるまで、殿下の剣となり盾となり戦い抜くことをここ

に誓います」

「ああ。これからよろしく頼むマリーカ。君のことはジェレミア卿からよく聞いている。

まだ15歳という若さでありながらも、類まれな実力を大いに発揮し、陸戦線機科でも最優秀の成績を記録したと」

「いえ、私などはまだまだ若輩者です。皆さんの足元にも及ばない身です」

「……謙遜する必要はない。それは間違いなく君の実力だ。自信をもってくれていい。

むしろ、それだけの実力を持っているからこそ僕は君を選んだんだ」

「！……はい、ありがとうございます！」

ライの言葉に戸惑いを覚えながらも、マリーカはしっかりと返事をする。その顔には若干の笑みが見られ、頬が緩んでいる。

マリーカは以前までコーネリアの従卒を務めていた。ゆえに皇族への礼儀・配慮もしっかりしている。

……だが、ライは今までマリーカが出会ってきた皇族とは全く違っていた。皇族としての奢りもなく、かといってコーネリアのような敵しさもない。どちらかと言えばシュナイゼルのようなイメージ

が感じ取れるが、ライはシュナイゼルのような作ったような雰囲気ではなく、素の雰囲気を感じる。

「それともう一つ。君は先ほど『命尽きるまで戦う』と言ったが、軽々しくそのような言葉を使わないで欲しい」

「……………え？」

「それが君の固い決意だということはわかる。だが僕の部隊には、命を捨てて戦うような特攻隊員はいらない。

たとえ僕一人が戦場から生き残ったとしても、そこからは何も生まれないからね……………」

「……………」

マリーカは思わず目を丸くした。それも当然。少なくともライが言っていることは主として言うことではない。騎士が戦場において最も大切なことは、主君を守ることにある。そのために騎士は存在する。だからこそ騎士は自分の命を捨ててでも主を身を挺して守るのだ。

ライがこのようなことを言うのは、100年前の自らが起こしてしまった惨劇からだろう。あの戦いで、領民を含め味方は一人残さ

ず死んでいった。全ては自分を守るために。

だからこそ、ライはマリーカに忠告した。あの惨劇を繰り返さな  
いたためにも。彼女のような若い騎士が戦争が終わるまで生き残って  
もらうためにも。

「……わかりました。不用意な言葉を口にしてしまい、申し訳あり  
ません」

「いや、それは君の強い想いがあってのことだろう？ 別に責めて  
いるわけではない。  
生きていれば何度でも立ち上がり、また戦えるからね。生き残っ  
て、共に戦ってほしい」

「ありがとうございます殿下」

「これからよろしくね。マリーカ」

「はい、シュタットフェルト卿。色々学ばせてもらいます」

「私も期待しているぞマリーカ。君と共に戦場に立てることを心待  
ちにしている」

「ジェレミア卿、お久しぶりです。私のほうこそ、どうぞよろしく  
お願いします」

ジェレミアとマリーカは、キューエルの紹介で会ったことがある。その時にナイトメアの訓練、皇族への礼儀作法などを教わったりしていた。

このことが、後にコーネリアの従卒を務めた際に役立ったという。

挨拶をすませたマリーカは気をつけをして、敬礼した。そして自分の仕事に戻っていくように部屋を退出する。

「……殿下。なぜマリーカにあのような言葉を？」

マリーカが去ったあと、ジェレミアがライへと尋ねる。  
やはり彼も騎士としてライの言葉を疑問に思ったのだろう。

「そのまんまの意味だよ。特に彼女は若い。そんな彼女に、簡単に死を選んで欲しくはない」

「お言葉ですが、騎士として主君を守るということはもはや騎士の存在意義となつています。

もし騎士が生き残つたとしても、主がいなければ……主を失つた騎士はどうすればよいのでしょうか!？」

ライの言葉を受け、思わずジェレミアが声を荒げる。

尊敬していたマリアンヌのことを思い出したのだろう。ジェレミアはあの時主君を守れず、己の忠義を　誇りを貫くことができなかった。それ以来彼は自らを盾として、なんとしても主を守るといふ覚悟をしていた。ゆえに、ライの言葉はとうてい納得できるものではなかったのだろう。

「……それくらいわかっているさジェレミア卿。

だけど、そんな心配はしなくていい……僕は、死なないから」

「……殿下」

「それとも僕を、信用できないか？」



「……滅相もございません。出過ぎた真似をしまい、申し訳ありません」

「いや、あなたの皇族を想う気持ちは良く伝わった」

ジェレミアが頭を下げるがライは特に気にした様子はない。  
ブリタニアですごした数日間、ライもジェレミアのブリタニア帝国・ブリタニア皇族に対する忠誠心が本物だということくらいは把握していた。そしてその一途な想いを重用していた。だからこそライはジェレミアに人事の仕事を一任していたのだ。

「……それで？ 彼女のことは今後どうするの？」

「明日、僕達の前で模擬戦を行ってもらおうと思う。ジェレミア卿、マリーカの相手を務めてくれ」

「Yes, Your Highness」

「それと、彼女のナイトメアも用意しないとね。ロイドさんにも相談しないと。」

「……そうだ。ついでに彼女に僕達のナイトメアも見せておくか」

マリーカに通達をだし、ライ達は明日の模擬戦に向けての準備を行い、さらにロイドと連絡し、格納庫にライやカレン、ジェレミアの専用機を配備させた。

……だがこのとき、ライは気づいていなかった。  
自分が行おうとしていることで、マリーカの復讐心を呼び覚ましてしまうことを。

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

- - - マリーカ side - - -

私はライ殿下が住んでいるという離宮へと訪れていた。

先日、亡くなったと思われていたジェレミア卿と再会し、そのときにライ殿下の部隊へ加わらないかと勧誘されたのだ。

ライ殿下は本当について最近表舞台に姿を現したばかりで、詳しいことは何一つわかっていない。

だけど私は、ジェレミア卿の言葉を　忠誠を信じてジェレミア卿の提案に承諾した。

最も、私がライ殿下の部隊に加わりたい理由は他にあるけれど……

「お待ちしていました。マリーカ・ソレイシイ様ですね？」

「はい」

「ライ殿下がお待ちです。どうぞこちらに」

仕えているメイドの案内で私は離宮へと入っていく。

……ここで私は疑問に思ったことがあった。

まず一つ。離宮でありながらも、それほど装飾がないということ。広さもそれほどでもない……むしろソレイシイ家本宅と同じくらいではないだろうか？

そしてもう一つは……使用人の数が少ないこと。

話を聞いたところ、殿下の要望で最低限の予算でこの離宮は作られたという。

しかも、使用人もそんなに必要ないということ、今はメイドが2人、執事が1人だけだと言う……いや、いくらなんでも皇族の方には少ない、少なすぎるように思う。警護は大丈夫なのだろうか？

「着きました。こちらで、ライ殿下がお待ちです」

そうして考えている間に気がついたらライ殿下がいらっしやる扉の前までやってきた。

……自然と脈が速くなるのを感じる。やはり意識するなというのが無理なのだろう。

以前コーネリア殿下の従卒とした経験があっても、どうしても緊張してしまう。

私は一度深呼吸し、そして扉を開いた。

……扉の先には3人の人がいた。

一人は殿下の傍にいるジェレミア卿。

殿下の親衛隊隊長に任命された人で兄の朋友でもあり、私も良く知っている。

ジェレミア卿は私を見ると若干の笑みを浮かべるが、私にはそれに返す余裕なんてない……ごめんなさいジェレミア卿。

そしてジェレミア卿とは反対側にいる方　カレン・シュタットフェルト卿。

この方のことも良く知られていない。ライ殿下が現れたときに、初めて名前を聞いた。

ただ選任騎士に任命されるくらいだし、ナイトメアの操縦技術にも長けていると聞いたのでやはりそれなりの実力者なのだろう。

シュタットフェルト卿は私をじっくり観察するかのように見ている……私の実力を探ろうとしているのだろうか？

……そして、ライ・エル・ブリタニア殿下。

整えられた銀色の髪。

深遠な青い瞳。

誰もが目を惹く、端麗な容姿。

おそらく身分のことを知らなかったら告白していたら……と  
いうか間違いない告白していたくらいに容貌。

殿下は笑顔で私のことを迎えてくれた……どうしよう。あの瞳を  
見ただけでも余計に緊張してしまう。その笑みは反則ですよ。

私は殿下にご挨拶を申し上げるためにも膝を折った。顔も隠れて  
ちよつどいいい。

「ライ殿下。お初にお目にかかります。私はマリーカ・ソレイシイ  
と申します。この度は私のような者を選出していただき、恐悦至極  
に存じます。」

この命尽きるまで、殿下の剣となり盾となり戦い抜くことをここ  
に誓います」

緊張しながらもなんとかうまく言葉をつなぐことができた。

……コーネリア殿下のときは何度も噛んでしまい大変だった。ジエレミア卿に練習してもらった甲斐があるというもの。

「ああ。これからよろしく頼むマリィカ。君のことはジエレミア卿からよく聞いている。

まだ15歳という若さでありながらも、類まれな実力を大いに発揮し、陸戦操機科でも最優秀の成績を記録したと」

「いえ、私などはまだまだ若輩者です。皆さんの足元にも及ばない身です」

「……謙遜する必要はない。それは間違いなく君の実力だ。自信をもってくれたい。

むしろ、それだけの實力を持っているからこそ僕は君を選んだんだ」

「！……はい、ありがとうございます！……」

殿下のお言葉が嬉しくて、思わず表情に出ってしまった。

やっぱり、この方は今まで出会ってきた人とは違う。モニター越しではなく、こうして直に会ってみて直接雰囲気味わうことで実

感できる。

全てを包み込み、人を惹き付ける魅力　まるで王のような風格

「それともう一つ。君は先ほど『命尽きるまで戦う』と言ったが、軽々しくそのような言葉を使わないで欲しい」

「……………え？」

……………殿下の言葉に思わず声を返してしまった。

実際、今の言葉はそれだけの内容だった。

「それが君の固い決意だということはわかる。だが僕の部隊には、命を捨てて戦うような特攻隊員はいらない。

たとえ僕一人が戦場から生き残ったとしても、そこからは何も生まれないからね……………」

「……………」



本当に、今まで出会った方とは違う。皇族ならばここは『私のために戦い、私のために死ぬ』とでも言う方とているのに。そして実感できる……この方は、おそらく本当に戦場を知っている。体験している。

不思議と、殿下の言葉は私の心に重く響いた。

「……わかりました。不用意な言葉を口にしてしまい、申し訳ありません」

「いや、それは君の強い思いがあつてのことだろう？ 別に責めているわけではない。

生きていれば何度でも立ち上がり、また戦えるからね。生き残つて、共に戦つてほしい」

「ありがとうございます殿下」

そんな私に優しい言葉をかけてしまった。

まるで本当の仲間にかけるような暖かい言葉を……

「これからよろしくね。マリーカ」

「はい、シュタットフェルト卿。色々学ばせてもらいます」

シュタットフェルト卿は私に手を差し出して握手をする。  
握られた手からはしっかり力がこもってきた。

「私も期待しているぞマリーカ。君と共に戦場に立てることを心待ちにしている」

「ジエレミア卿、お久しぶりです。私のほうこそ、どうぞよろしく  
願います」

ジエレミア卿も私の加入を喜んでくれた。

この方達のご期待に答えられるように、精一杯努力しないと!!



殿下との対面を済ませ、使用人の方とも挨拶を済ませて帰ろうとしたところ、ジェレミア卿に引き止められた。

……なんだろう。まさか私、殿下に対して無礼な真似をしてしまったの!?

「そんなに身構えなくていい。私は殿下より伝言を言付かったただだ」

「……ライ殿下からですか？」

よかった。どうやら私の思い過ごしだったみたい。  
でも殿下から私に何の用だろう？

「殿下が君の実力を直に見たいと仰られてな。明日、殿下の前で模擬戦を行う」

「模擬戦!?! 明日ですか!?!」

自分の耳を疑いたい。

一体何の冗談ですかと問いただしたい。

まさかいきなり明日、殿下の目の前でだなんて……

「あまり考えすぎるな。何もこのことだけで君の評価を決めようとしているのではない。」

私が考えるに、ただ純粹に君の戦う姿を見たいというのが殿下のご意向だろう」「

「……………それでもですよ……………」

「そう言うな。ついでに、模擬戦の相手は私だ」

「そうですか。それならまだ安心……………出来ないですよ!! なんていきなりジェレミア卿が相手なんですか!？」

ジェレミア卿の実力は、訓練をしてもらった私も良く知っている。少なくとも、そこらの騎士などの数倍は優れている。

それなのに、いきなりジェレミア卿と戦うなんて…………

「はっはっは。私は君の成長振りを見られるので楽しみだぞ。まあ、いつもの訓練だと思ってくれればいい」

「はあ……」

『胸を借りるつもりで来い』ということなんだろうけど、やっぱり気が進まない。

確かに、シユタツトフェルト卿のように全然知らない人が相手よりはマシなのかもしれないけれど……

「それとな、模擬戦の前に君のナイトメアに対する意見も聞きたいらしい。」

殿下たちのナイトメアも見るチャンスだぞ？」

「!?!? え……殿下もナイトメアを？」

「ああ。殿下の実力は私が保証する。ひよっとしたら殿下直々に相手をしてくださるかもしれんぞ？」

「それほどの強さをお持ちなんですか……」

ジェレミア卿が認めるといふのだから、本当にそれだけの實力をもっているのだろう。

ライ殿下は一体何者なのだろう？

今まで名前を聞いたこともなかった。だけど實力も、風格も……全てがかけ離れている。

あの方の傍にいて、それもわかってくるのかな……？

.....  
.....  
.....  
.....

「.....ふああ」

ジェレミア卿とも別れ、自室に戻った私はたまらずベッドへと倒

れこむ……今日は本当に疲れた。

だけど、明日のことを考えると落ち着かない。

ジェレミア卿との模擬戦。うまく戦えればいいんだけど、殿下の目の前でちゃんとできるだろうか？

「……………今それを考えても仕方がない、かな？」

私は起き上がって、机の上に飾ってある2枚の写真のうち一枚を見る。

私の兄　キューエル・ソレイシイの写真。

キューエルはナリタの戦いで黒の騎士団の攻撃を受けて戦死した。不名誉な評価のまま、エリア11で……

軍人という仕事上、いつ死んでもおかしくはない。文句は言えない。

でも……それでも私はキューエルの死を忘れることはできなかった。

あれだけ優しかった兄を、ジェレミア卿と時には対立しながらもお互い認め合っていたキューエルを……



私がライ殿下の誘いを受けたのは、兄の名誉挽回のためでもある。殿下は皇帝陛下より、エリア11の掃討を命じられた。私もエリア11の戦闘に参加するために殿下についていくことを決意した。

「キューエル。私に力を貸して。名誉は私が取り戻す。仇も、私が討つから……！」

私はキューエルの写真を抱きしめ、ひたすら願った。

そして、もう一枚の写真をにらみつけた。  
キューエルを討つたという黒の騎士団のナイトメア  
式式を。

紅蓮

-. -. マリーカ side end -. -.

マリーカがライ達と面会した翌日　予定通りマリーカとジェレミアの模擬戦の日である。

マリーカは朝早くに屋敷を出て、所定の場所であるライ達のナイトメアの専属開発チーム『キャメロット』の研究室に来ていた。

そこにはすでにライ・カレン・ジェレミア、そしてロイド・セシルの姿が見える。

「殿下。遅くなってしまって申し訳ありません……マリーカ・ソレイシイ。ただいま参上しました」

「いや、まだ約束の10分前だ。僕達が君のことが楽しみで早く着すぎただけだよ」

ライはマリーカを笑って出迎える。これにより、マリーカの緊張もだいぶほぐれたようだ。

ロイドとセシルの案内で全員研究所に入っていく。

まず全員が見たのはジェレミアの機体　サザerland・ジークである。

「これが我が忠義の機体だマリーカ。正式名称は『サザーランド・ジーク』。」

「……ああ、そうだ。今回の模擬戦は君と同じく私もグロースターを使うから安心してくれ」

「は、はい……」

今まで見たこともないような機体を見てマリーカは軽く驚愕していた。

「どうやら今日の模擬戦でこの機体と戦うと思ったらしい。」

「もっとも、機体が同じであっても相手が相手なので完全に安心することなどできないわけだが。」

さらに場所を移して今度はライ達のナイトメアのスペースに移る。現在、パーツを改装中であるライの愛機 『月下』。ただし、騎士に所属している四聖剣が愛用している月下と違い、色は深い青色で、その左手には輻射波動が備わっている。

この姿を見て、マリーカはこの機体が誰のものなのかすでに聞くこともなく理解した。

「……ジエレミア卿。この機体が、まさか……」

「そつだよマリーカ。これが僕のナイトメア　『月下』だ。  
現在ロイドさんとセシルさんに開発を頼んでいるところなんだけどね」

「それでも十分強いんですけどね……特に、殿下がご搭乗なされれば。んふふふふ」

ロイドが何かを思い出したかの、うれしそうに笑いだす。

マリーカもロイドの様子から、ライの実力が本物だということ、そしてすでにロイド達から信頼を得ていると言つことを改めて実感した。

「殿下とシュタットフェルト卿の機体は機体性能が高く、今度のエリア11侵攻においても重要な役割を果たすであろうことから、現在優先的に強化を行っているところなんです」

セシルが補足するように述べる。

現にこの2機はランスロットとも並ぶほどの性能を持つ。今度の戦争においても、強化されたその姿で大いに活躍することだろう。

「それで、反対側にあるこの機体がシュタットフェルト卿の機体です」

「へー……シュタットフェルト卿の機体も………え？」

マリーカが期待を高めてカレンの機体を見るべく振り返る。だがその瞬間、彼女の思考は完全に静止した。

ライの月下と向き合うように並んでいる機体。

赤く塗装されたボディ。

先が鋭利な爪状になっている巨大な右手が最大の特徴

『輻射  
波動』。

忘れるわけがない。見間違えるわけがない。  
忘れられるわけがない。

「これがね、シュタットフェルト卿の専用機の……」

「……紅蓮式。ですよね」

「あれ？ 知ってるの？」

「ッ！ なんて……なんでこの機体がここにあるんですか……！」

ロイドの言葉をさえぎるようにマリーカが叫ぶ。その声には、確かな怒りがこめられていた。

「? ……マリカ。知らないのは仕方がないことだけれどこの機体は……」

「なんで、なんで兄を殺したこの機体が！ ここにあるんですか！」

「なっ！！」

ライはマリカが状況を知らないから出た言葉だと思った……だが違った。

マリカにとって紅蓮式式はマリカの兄、キューエルの命を奪った忌々しい機体だったのだ。

ライは周りには聞こえないような小さい声でジェレミアとカレンに話す。

「……ジェレミア卿。今の話は、本当か？」

「おそらく事実かと。私はいち早く脱出してしまったので詳しくはわかりませんが、たしかに純血派はナリタにて紅蓮式式と対峙しました」

「！ ……カレン、どうだ？」

「……本当だと思う。私も何機か倒した後コーネリアの方に向かったけど……2、3機ほど脱出できないまま爆発した機体だったから……」

「……うかつだった」

キュールエルのことはライも知っていた。しかしだからこそ、騎士団と対決することで彼女は兄の弔い合戦を行えると思っていた。だが、まさかキュールエルを殺したのが紅蓮だったということ情報は全然入っていなかった。

しかしながら、これは仕方がないことである。

ジェレミアは脱出してしまっただけで今の今まで生死不明だったし、カレンは相手のパイロットのことなど知らない。

ライにいたってはなおさらだ。彼は作戦が始まってすぐに敵の別働隊の迎撃にあたり、純血派とは遭遇することなく終わった。

……それでも、今回ばかりは仕方がなかったで済ませられることではない。マリーカにとっては、憎き仇が今日の前に現れたのだから……」

「マリーカ……確かにこの機体は騎士団のものだったが、今は……」

「『今はブリタニア側の機体だから』ですか？ だから兄の仇を許

せと、そう仰るんですか!？」

「……!」

マリーカの反論にライは返す言葉がない。

現に彼女の言っていることは何も間違っていない。もしも自分の立場だったならば、許せただろうか? ……いや、きっと許せていないだろう。その思いが、ライの口を閉ざさせた。

「……ジェレミア卿」

「……なんだ、マリーカ」

「今回の模擬戦、中止にしてください。そのかわりこの機体と……紅蓮式と戦わせてください!！」

「「「なっ!?!」」」

マリーカの突然の模擬戦の中止と、代わって紅蓮式との対戦の提案。

さすがに予想もできなかった言葉に、皆は驚愕するしかなかった。

「……だめだ。大体、グロースターと紅蓮では機体性能が違いすぎる。」



それに紅蓮式式の最大の武器は輻射波動であり模擬戦には使わせないわけにはいかない。そうになるとサザランのパーツを補うことになるんだが……」

「いいえ。輻射波動もついた状態で戦いたいんです」

「!?!」

「マリーカ!」

ライが紅蓮との模擬戦は無理だと言う中、マリーカは輻射波動もありでの戦闘を望む。

それはもはや模擬戦ではなく、ただの決闘だ。傍観していたジェレミアも思わず声を荒げ彼女を止める。

144

「お願いですライ殿下! ジェレミア卿! ……せめてキューエルの仇と、本気で向き合わせてください」

「……」

「私がかまわないわ」

「!?!? カレン!?!?」

「何も言わないでライ。この子はもう、何を言ってもとまらないはずだから……」

カレンはマリカをまっすぐに見つめる。

カレンは今の彼女の姿にかつての自分の姿を  
の自分の姿を重ねて見ていた。

ライと出会う前

第七話（中編） 譲れぬ思い（後書き）

予定ではこの回で一気にマリーカ編をまとめるつもりでしたが、変更しました。

かなり短くなってしまい、申し訳ありません。

第七話（後編） 兄を想う者（前書き）

小説を書いてて決意しました。

次ギアスの小説を書くときは、絶対マリーカをヒロインにする！！  
……ライマリ小説にする！！

第七話（後編）

兄を想う者

場所を移して旧コロシウム。

現在そこに、ライ達は来ていた。

『……二人とも、準備はいいか？』

『うん』

「……はい」

紅蓮とグロースターが対峙している。

マリーカの要望で、紅蓮には輻射波動がつけっぱなしであり、またマリーカの装備も模擬戦ようのものではなく、全て実戦のものを装着している。中にはアサルトライフルのような飛び道具まである。カレンがこれを了承してしまったためにこのような形になってしまった。

これはもはや模擬戦などではなく 『決闘』だ。

だが念には念をとということ、いつでも二人を止められるようにとライとジェレミアはそれぞれの機体 月下とサザerland・ジークに乗っている。

『確認するが、ルールは時間無制限。相手の武装を完全に無効化させるか、降参で終了。あるいは僕が危険だと判断すれば、その場で終了とする』

本来ならポイント製で行うのだが、あいにく模擬戦の装備ではないためこのようなことになってしまった。

にらみ合う両者。始まりの時を静かに待っている。

『それでは……始め！』

その言葉を境に戦闘が開始する。

先に仕掛けたのはマリーカ。グロースターの主要武器、ランスで突撃する。

紅蓮はこれを横に飛んでかわし、輻射波動の右手で攻撃を仕掛けるが、マリーカはハーケンを横の壁に打ち込み、急加速。先ほどまでグロースターがいた場所に、紅蓮の鋭利な爪が通り過ぎた。

「……速すぎるー！」

マリーカはこの一瞬の攻防だけでも、自分とカレンの実力差を悟った。

今まで模擬戦でも本物の機体を使つての演習もやったことはある。グラスゴー、そのコピー機である無頼、サザerland、グロースター。

……だが違う。この機体は、マリーカが経験してきたものとはまるで比べ物にはならない。

この機動力、俊敏性。全てが予想以上だった。それほどの相手だった。マリーカがずっと追い求めていたものは。

「でも、そうだとしても……私は！」

マリーカはアサルトライフルを放つ。

だが紅蓮はその銃撃をもともせずにかわし、どんどん迫ってくる。

ついに目の前まで迫った紅蓮に対し、マリーカはランスを突き出す。それを紅蓮は右手で受け止めた。そのままカレンは輻射波動を展開する。

「な！？　これが、あの輻射波動！？」

ランスを伝い、ランスを所持していた右腕まで輻射波動が侵食する。マリーカは瞬時に輻射波動によって沸騰しかかる右腕を切り離し、アサルトライフルで反撃に出ようとするが紅蓮はそれすらもかわしていく。

……ランスと右腕。

マリーカはまだ一度も攻撃を当てていないというのに、すでに主要武器を右腕を失ってしまった。

「……こんなことが……」

とてもではないが信じられない　いや、信じたくないことだった。

ここまで一方的な展開になるとはさすがに予想もしていなかった。

それでもマリーカは折れそうな心を建て直し、再びアサルトライフルを放つ。

紅蓮は今度は左右に動いてかわし、ミサイルを発射した。



「ッ！ うあッ！！」

ミサイルはアサルトライフルを直撃。これでさらにアサルトライフルまで失った。

勝負を決めるべく、紅蓮は突っ込む。

武器を失ったグロースターはハーケンを紅蓮に向けて射出するが、それも輻射波動によって受け止められ、破壊されてしまった。

「そんな……こんなにも！」

『……ごめんね』

「きゃあああー！」

さらに紅蓮は呂号乙型特斬刀で特攻をかける。

刀はグロースターを切り裂き、左腕を刈り取った。

ランス、右腕、アサルトライフル、ハーケン、左腕。

わずか三分たらずの攻防で、マリーカは全ての武装を破壊されてしまった。一撃も紅蓮に攻撃することさえできずに。

万策尽きた。もはや勝負は決まった。

「…………ッ！　うあああああああ！！」

『！？』

だが、それでもマリーカはとまらなかった。  
完全に武装を失っても、それでもなお紅蓮に向かって突撃する。

「…………ッ！？」

『…………そこまで、マリーカ』

『もう勝負はついた……………ここまでだ』

「…………ッ！！」

紅蓮に向かって蹴りを放とうとしたとき、ライとジェレミアが二人の間に割ってはいる。

ライは紅蓮の正面に立ち、ジェレミアがマリーカの機体を止める。

完全敗北。

この言葉が、マリーカの脳裏に移り込んだ。  
何も出来なかつた自分を責めるように。  
容赦ない現実を突きつけるかのように。  
自分の無力さを示すかのように。

-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-

ライはマリーカのことをむしろ褒めた。

『紅蓮相手にあれほどの動きをできるのはすごいことだ』と。

だが、その言葉はマリーカを満足させるには至らない。

復讐相手に何もできずに、一方的に叩きのめされた。もしもあれが戦場だったならば、何もできずに兄・キューエルを同じ道をたどっていたことだろう。

機体性能に差があつたとしても、その機体を自由自在に操れるほどの実力があるからこそ差が生まれる。おそらく自分ではあの機体ほどのレベルを操れるほどの力はないだろう。

完全に、実力で劣っていた。

対戦が終わったあとでも、マリーカはその場から動こうとはしなかった。

「私は、どうすれば……」

「マリーカ。少し、いい？」

「………なんでしょうか。シュタットフェルト卿」

ある意味今一番会いたくない相手、カレン。  
兄の仇である機体に乗る、つい先ほどまで戦った相手。

「今も、紅蓮が憎い？ あの機体が」

「……憎いですよ」

カレンの質問にマリーカは包み隠さずに答える。  
聞かなくてもわかりきったことだった。兄の仇をそんな簡単に許すなど、彼女にはありえない。

「あなたは、何のために戦うの？」

「……キューエルの仇を討つためです」

だが、皮肉にも仇はもはや味方の機体である。討つどころかもはや戦うことさえないだろう。

キューエルの仇は討ちたい。しかし祖国に反逆する気などない。兄の仇を討つのならばここいはいれない。祖国を守るならば復讐を忘れなければならない。

結局、どちらか一つしか選べないのだ。

「そっか……昔の私と同じか」

「……………え？」

「私もね、昔お兄ちゃんがいた。いつも優しく、私のことを守ってくれて……そんなお兄ちゃんが大好きだった」

「……………」

カレンが昔を懐かしむように話します。その表情はどこか穏やかで、もうその事実は過去のことと割り切っているようだった。

「だけど、その兄も……エリア11での戦闘で亡くなった」

「!」

「私も兄の仇を忘れることなんてできなかった。だから私は戦う道を選んだ。」

もう絶対、私は復讐を忘れることなんてない。復讐のためだけに戦う……前はずっとそう思っていた」

自分と同じ境遇。

好きだった兄を戦場でなくし、その事実が許せなくて戦うことを選んだ。まさに今に自分だった。

だが、カレンの話しは全て過去形だった。

「……じゃあなんで、復讐を忘れられたんですか？」

「忘れてなんかないわ……ただ、それよりも大切なものが出来ちゃったから、かな？」

「大切なもの？」

「うん。それに、お兄ちゃんの気持ちも考えてみたの。」

お兄ちゃんは今私が復讐に溺れて戦うことを喜ぶかな……って」

普通に考えれば喜ぶものなどいない。キューエルだってそうだ。



「このように言葉をかけられて、なおさらわからなくなってしまった。」

私は、何のために戦えばいい？

せつかくライに取り立ててもらったというのに、こんな迷っている状態ではなんの役にも立たないだろう。

「……はあ。これじゃあ、殿下にも会わせる顔がない」

「誰に会わせる顔がないって？」

「ひゃあああああ！……で、殿下！！」

独り言を呟いたマリーカの後方からライが声をかける。その横にはジェレミアの姿もある。

突然声をかけられたことで体が硬直してしまったマリーカだったが、ライは『気にしないでいい』と言ってなだめる。

「……本当にすまなかった。マリーカ」

「なんで、殿下が謝るのですか？」

「今回の件は完全に僕の不注意だった。君の事情も知らずに、君を巻き込んでしまった」



「そのよづな」は……」

「いや、マリーカ。これは我々の総意である。殿下も私も、君のことをもつとよく知っておくべきだった。

それなのに、君をさらに傷つけてしまった……すまない」

ジェレミアがライに代わって答える。

……思うに、ジェレミアが一番紅蓮と　カレンと因縁が深い。

クロヴィスの研究所から毒ガス（本当はC・C・C）を盗み出した時は、ルルーシュがいなかったらカレンはジェレミアに殺されていただろう。

逆にナリタの戦いにおいては、紅蓮式式の力によってカレンがジェレミアを倒した。

敵として命のやり取りをしたカレンとジェレミア。だが、今では普通に同僚として接している。

「……ジェレミア卿は、もう紅蓮を許しているんですか？　自分を倒した相手を。憎かったんじゃないんですか？」

「然り。これで皇族への忠義も果たせなくなったと考えたからな。

だがあの時は信じるものが違ったからこそ起こったもの。今は志を同じくする同志！　そう。ならばこそ、私がいまだに彼女を恨む理由は存在しない！」

かえって清々しいほどのジェレミアの返答。もはや仇ではなく、仲間だと割り切っていた。

カレンも、ジェレミアも……みんな今を見ている。自分だけが過去にとらわれている。いまだに過去を引きずっている。

うらやましい。そんなに純粹に信じるものがあって。

「……マリーカ」

「！」

うつむいて、考えこんでいたマリーカをライは引き寄せてそっと抱きしめた。

マリーカの頭を撫で、ライはそっと声をかけた。

「憎むなどと言わない。恨みを、仇を忘れるとは言わない。僕にそんなことを言う資格はない。だけど、復讐に囚われるな。復讐のためには戦うな。」

「少しずついい。少しずついいから、皆と分かり合って前に進んでほしい……そうして生きてくれると僕は嬉しい」

「……殿下」

「心の整理がついてからでいい。今は、少し休みなさい」

「……はい」

ライは最後に笑みを見せ、そう締め括った。

かつてライも憎き父と兄を殺し、そして滅びの道をたどって行った。その彼の言葉には感じ入るものがあったのだろう、マリーカはどこか穏やかな顔を見せる。

「あの、殿下……」

「なんだい？」

「もう少しだけ……もう少しだけこのままいさせてください」

「……ああ。いいよ」

「……ッ！……う……う……う……！」

ライはマリーカをそっと抱きしめ、マリーカの想いを全て受け止めた。

マリーカの涙が枯れ果てるまで、泣きつかれて眠るまで彼女を支えていた。



もっともカレンは気にしていないし、むしろ自分の方が悪いと思  
っているわけだが・

「気にしないでいいわ。それより、もう大丈夫？」

『はい。おかげさまで、色々吹っ切れました』

その声ははつきりとしていて、余裕があつた。先ほどのような切  
迫した声も、迷っていた声も完全に消えていた。

「そう。それならよかった……改めて、よろしくね」

『はい。ただその前に、シュタットフェルト卿に一つ言っておきた  
いことがあります』

「ん？ なに？」

マリーカはそこで一度言葉を区切る。  
そして、決意したようにカレンに宣言した。

『……ま、負けませんから……』

「……へ？」



した」

「いいんだよマリーカ。それよりも僕が気にしているのはこれからだ。」

……マリーカ・ソレイシイ。これから先、君は何のために戦う？」

「はい。私は兄・キューエルの名誉を取り戻すために、ライ殿下をお守りするために戦います。」

そのためにもジェレミア卿やシュタットフェルト卿にも、ご指導をいただこうと思います」

「……そうか。ありがとう」

兄の仇を討つのではなく、兄の名誉のためにも、そして兄の遺志を継いで戦うことを選んだ。

これは以前の彼女と比べれば大きな進歩だった。カレンの名前をだしたことでその様子は伺える。

「それと殿下……失礼ながら、私のほうから一つお願いがあるのですが」

「？ なんだい？」

「私を、殿下の従卒に任命してくださいますか？」

「……………従卒？」

\*\*\*じゆうしゆ従卒\*\*\*

将校に専属して、身の回りの世話などをする兵卒のこと。

かつてマリーカはコーネリアの従卒を務めていたこともあるし、別に問題はない。おまけにライの場合は使用人が少ないのだ。

ライの身の回りの世話をしつつ、近くにいたいというのがマリーカの本音だった。

「はい。殿下は使用人の方もあまり雇っていません。それなら私が行いたいと思います。

お許しがあれば、朝から夜まで……………殿下がお望みならば、深夜のご奉仕も行います！！」

「……………？」

言葉にならないとはこういうことだろう。

ライはこの時思った。

僕は、何か彼女に間違ったことを言ってしまったのか？  
—  
体僕の何を世話をするのだろうか？



ライは沈黙しかけた脳をなんとかフル回転させ、会話をつなぐ。

「えっと……マリーカ？ 僕は……」

「何を言ってるのよあんだ！！」

だが、ライが言う前にカレンが前に出てきた。

残念ながら、ライが他の女性と親しくなりすぎるのを許す彼女ではない。

「なんでですか！ 殿下が不自由ないように、と思つての行動ですよ！」

「物事には限度があるのよ！ 大体、ライの近くには私もいるし問題ないわ！」

「でも実際この広い屋敷では人手もたりないみたいじゃないですか！  
それに、いざというときのためにも身近なところでお守りするの  
が大切なんじゃないんですか！？」

完全に二人だけの世界になってしまった。こうなつてはライの言葉も届かない。この言い争いはとまらない。

ライは隣のジェレミアに話しかける。

「ジェレミア卿。僕は何か間違いを犯してしまったのだろうか？」

「いえ。殿下は何も間違っではおられません。今は、マリーカが復活したことを喜ぶべきではないでしょうか？」

「……それもそうか」

このようにカレンとも仲良く(?)話せるようになったことを喜ぼう。

ライは、今度こそ本当の意味でマリーカが仲間になったことを喜んだ。

ちなみに、カレンは反対したがライとジェレミアの意見でマリーカはめでたくライの従卒に任命された。



**番外編 マリーカの悩み（前書き）**

現在活動報告にてアンケートを実施しています。  
ご協力よろしくお願ひします！

## 番外編 マリーカの悩み

マリーカはライのことを主として尊敬しているだけではなく……  
なにか恋心にも似た感情を覚えた。

不覚にも、仕えるべき主に慰められ、その腕に抱かれて泣いてしまった。だが、ライはそんなマリーカに何一つ言うことなく受け入れてくれた。

あれほどの美貌と能力を持ち、そして皇族でありながらも部下である自分にもあのように優しく接してくれる……これほどの人はいない。まずい。多分ブリタニアに二人としない。むしろいいけない。

このような方の腕に抱かれてなんとも思わないような女はいない……いるのならできてもらいたい。というか、そのような人はもはや男性に興味が無い人だろう。

……だが、そのライの隣には絶対的存在とも言えるカレン・シュタットフェルトがいる。

おそらく二人の仲はマリーカが考えている以上に深いものだろう。現にカレンは時々ライのことを呼び捨てでもよんでいるし、ライもそれを認めている。息もぴったりだ。

つまり、マリーカにとってライに想いを伝えるにあたって一番の壁がカレンだった。皮肉にも、恋のライバルにまで発展してしまう

とはこの二人って一体……

そこでマリーカは考える。

私がシュタットフェルト卿より劣っているものって何だろうか？

顔にいたってはいい勝負だと思う。カレンも美人の類に入るだろうが、マリーカも幼さが残っている部分があるが、同年代の中では断然可愛い方だ。

性格……これはひょっとしたらカレンにも勝っているのではないかもマリーカは思う。

なにしろカレンはたまにがさつな一面が見られる。それがたとえライ相手であろうと……いや、どちらかと言うとライ一人に対しての方が多いいのではないか？

それともまさか二面性？ 殿下はギャップがある女性の方が好きなのだろうか？

まあ、一応性格については互角ということにしておこう。

となるとやはり問題となってくるのは……体か。

よく考えたら、ライ殿下の周りにはスタイルが良い女性が多すぎではないか？

カレン・セシル・コーネリア。マリーカは咄嗟に思い浮かんだ女性の名前を想像していく……あ、だめだ。勝ち目がない。無頼VSガウエイン並みに勝ち目がない。

どの人もスタイルがよく、かつ豊富な部類に入るその胸も相まってナイスバディの一言に尽きる……本当に憎たらしい。一体何を食べたらあんな風に成長するのだろうか？

だが、まだマリーカは発育途上である。他の女性と比べれば胸もお尻も小さいが、むしろその筋の方々にとっては理想的バランスを保っているだろう。

しかし今のマリーカにはそれに気づく余裕がない。今カレンに勝たなければ意味がないと必死である。

-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-

「……それで？ 一体私に何のようだマリーカ？」

「すみませんジェレミア卿。お忙しい中私のために時間を割いてい

ただいて……」

マリーカはジェレミアを呼び出した。自分と親しく、かつ男性の気持ちを感じる頼れる相手……ジェレミアしかいなかった。

兄に聞ければ一番よかったのかもしれないが、残念ながらそれは不可能。

ロイドにはそんなこと聞いてもおそらくまともな返事が返ってこない。

ライ本人に直接聞きに行くのはさすがに無理がある……となると、ジェレミアしかいなかった。

「構わんさ。他でもない君の頼みだ……それで、聞きたいこととは？」

「あの、なんとというか、その………男の人って、やっぱり大きい方が好きなんでしょうか!？」

……沈黙。マリーカの予想を超越した言葉にジェレミアの時間が静止する。残念ながらギアスキャンセラーが発動しない。思考が一時的にフリーズする。

ジェレミアは心の中で今は亡き友に対し、彼の妹を守れなかったことに対して一言謝罪した。



「……一体どうしたんだマリーカ。なぜそのようなことを聞く？」

「えっと……言いくいんですけど……やっぱり殿下のお傍に仕えるにあたって、殿下の理想の女性の姿でありたいなー、と思ったといえますか……いえ、決して変な意味ではないですよー！」

この一言でジェレミアは全てを悟った　　そうか、マリーカもそんな時期だったのか。

そして真剣に考える。キューエルが亡き今、マリーカが頼りにできる男はもはや自分だけ。可愛い妹のような存在である彼女の恋は全力で応援しなければならぬ。妹の期待には……全力で！！

「ふむ、そうだな。殿下自身はそのようなことを気にすることは無いとも思える。」

……しかし！　やはり男たるもの、そういったスタイルの女性に目を惹かれることはあるだろうな。それは殿下であっても例外ではないだろう。」

「……やっぱりですか。じゃあ……どうなったら……む、胸は大きくなりますか？」



.....

一方、場所が変わってキャメロット研究室。

『……戦闘終了。紅蓮は所定の位置に下がってください』

「どうですか？ シュタットフェルト卿。新しい紅蓮の調子は？」

カレンがシミュレータで新しい機体 『紅蓮可翔式』 のテストを行っていた。

紅蓮式式と比べ機体性能がかなり上昇し、新たな武装やフロートユニットが搭載され、さらなる強化が行われた。だがカレンはそれに動じることなく自分の手足のように新しい紅蓮を操縦する。

「いいですね。輻射波動も強力になっていますし……この調子でお願いします」

「わかりました。殿下の機体も現在調整中ですので」

シミュレータのデータを整理すると、カレン・ロイド・セシルはライの離宮へと向かう。

ロイドとセシルは、もうすぐライの機体の最終調整が終わるので、その報告。そして何か要望があれば直接伺うということだった。

離宮につくと、ジエレミアとマリーカが入れ違い、現在はマリーカがライの護衛に当たっているという。

まだマリーカが従卒に任命されて3日だが、使用人たちもすっかりマリーカとなじんだようだ。

「……マリーカ君も実際すごいですよね。彼女のスコアもなかなかのものでしたよ」

「彼女ならまだまだ伸びるでしょう。問題は、実戦で戦えるかどうかです」

「確かに、マリーカは実戦経験が乏しいですからね。ですがシュタットフェルト卿との戦闘を見た限りではシミュレータと同等の動きを見せていました」

「あとは、本番でどうなるかな」

マリーカもなかなか優秀なパイロットである。エースと呼ぶには荷が重いかもれないが、それでも軍人の中では高い成績をほこる。紅蓮との戦闘でも、圧倒されていたとはいえグロースターを巧みに乗りこなしていた。

「ですがシユタットフェルト卿……大丈夫ですか？」

「？なにがですか？」

「いえいえ。殿下とマリーカ君という若い二人だけの空間……間違いが起こったりしないかな？って思ったり……」

「ロイドさん？」

「……あ、いえ。ごめんなさい冗談です」

ロイドが妙なことを言い出すのが、女性二人の鬼のような威圧感の前にすぐ口を閉ざした。

ライが女の子に手を出せるわけがない。

それがカレンの考えだった。ライならたとえマリーカと二人つきりになったとしても、何も早まったことをしないでろうし、何もできない。そんな勇氣のかけらも持っていない。権利をたてにして従わせるなんてこと考えられるわけがない……と。

というか、実際カレンがライからそんな大胆なことされたことがない。そんなライがカレン以外の女に手を出すはずがない。

そんなまずありえないことを話しているうちにライとマリーカが待っているだろうライの部屋へとたどり着く。

「殿下。カレン・シュタットフェルト、ただ今戻りました……？」

「……あれ？」

「……え？」

カレンがまず挨拶し、それにロイドとセシルが続こうとする。  
だが彼らは主への挨拶をすることなく、ライとマリーカの動きに  
釘着けとなった。

「……あ」

「……はあ……はあ……」

予想以上に早かったカレンの帰還にライはおどろく。

ライはマリーカを自分のひざの上に座らせ、彼の手はマリーカの  
胸を服ごしで包み込んでいる。しかもマリーカの口からは色っぽい  
声が溢れ、息もなんだか荒い……

「あつはー……殿下もやっぱり男性だったんですね」

ロイドがなんともわかりやすくこの状況を口にした。

しかし、カレンは特に言うことなくライ達に近づいて行って……



ら殿下にお願いしたんです。

その……殿下の思いがままに、私の胸を揉んでください……って」

カレンがライに問い詰めるが……しかし、まさかのマリーカがお願いしたという事実が発覚。

顔がこれ以上ないほど赤く染まっており、自分の恥ずかしさもちやんと自覚しているのだろう。

「……なんでそんなこと言ったのよ!!　そしてライもどうして言われるがままにしているのよ!」

「ち、違っ!!　『そうじゃないと私、殿下の傍にいられません』って、真剣そうに言ってたから!」

「えっと……その……ジェレミア卿に教わって……」

「……あのオレンジか!」

カレンはライの肩を激しく揺らしながら講義する。

だが、マリーカの元凶発言にカレンの怒りは一気にジェレミアへと移っていった。





「……ちよつとあのオレンジ、しばいてくる」

「カレン、落ち着いて!!」

カレンが軽い足取りで部屋を出ようとするのをライがとめようとするが、ライの制止を振り切つてついに出て行ってしまった。今のカレンは冗談抜きで誰かを殺しかねないほどの勢이었다。

「……マリーカ君。勇気を振り絞つたところ悪いけど……それ嘘だよ」

「……え？」

一方、話を聞いていたロイドがマリーカに真実を告げる。  
マリーカは思わず目を丸くした。

「それは医学的に根拠のない噂話であつてね。揉んでも大きくはならないんだ」

「……それじゃあ」

「残念でした。君、だまされちゃったみたいだね」



思わずマリーカ涙目。オロオロする姿が小動物みたくて可愛らしい。

そんな彼女を見るに耐えなかったのか、ライが頭を撫でながら優しく声をかける。

結局マリーカの体には変化は無かったが、心はだいぶ落ち着いたようである。周りのことは気にせず、今の自分で勝負することにしたそうだ。

## 番外編 マリーカの悩み（後書き）

感想でライの周りには復讐を考えるものが多いという意見を頂きましたが……それ以上に、ライの周りにはスタイルの多い女性が多い気がします。

ミレイやシャーリーもそうですし、C・C・Cもバランスがいい。千葉やヴィレッタ、ラウンズの女性もアーニヤを除けば……うん、多い。

## 第八話　ブリタニアの魔女

ブリタニア本国のとある離宮。しばらくの間、主が不在だったこの場所に、その主が妹と騎士達を引き連れて戻ってきていた。ブリタニアの第二皇女、コーネリア・リ・ブリタニアである。

彼女は先ほどまでエリア11の総督であつたが、黒の騎士団との戦いに敗れエリア11は解放、本国へと帰国した。

『ブリタニアの魔女』とまで敵軍に呼ばれ、恐れられていた彼女の敗戦は本国に瞬く間に広がった。この敗戦の罪を咎められるのかとも思われたが、皇帝は何も罰しない。だが、それでプライドの高い彼女が納得するわけもなく、自分から離宮に下がって行ったのだ。

今は、久しい平穩を妹　ユーフェミアや、彼女の騎士達　ギルフォードやダールトンとすごしている。

「……コーネリア殿下」

「どうした？　何用だ？」

庭園で紅茶を飲んでいた彼女の元に、仕えているメイドがやってきた。「急の用でも無い場合は呼び出さなくてよい」と命令していたため、何かが起こったのかと思わず身構える。

だが、その内容は彼女が想像していたものとはまったく別のものだった。

「お楽しみの最中に申し訳ありません。  
ライ殿下がコーネリア殿下にお目通りしたいと、やってきております」

「ライ……あの新参者のことか？」

コーネリアは若干批判したような言葉をメイドにかける。メイドは短く肯定の返事を返すだけだった。

コーネリアからしてみれば、ライはいわば『お飾りの皇族』であった。

今までその名前さえ知らなかった皇族が突然表舞台に現れた。しかも見た目からしてまだ子供であり、体つきや風格からしてもどこかの学生のようなイメージがあった。さらにその新参者が自分が敗れた黒の騎士団の掃討を命じられ、コーネリアはライのことを悪い印象しか持っていなかった。

「なんでも、コーネリア殿下にはいまだにご挨拶ができていなかったので、そのご挨拶にと……」

「……断るのは失礼であろう。客間にご案内しろ」

コーネリアはメイドに命じると、ユーフェミアに自室に戻るよう





ギルフォードがわびようとするが、ライは気にする様子もない。コーネリアに自己紹介をしようとするライだったが、コーネリアが彼の口を閉ざす。

コーネリアはライの一挙一動に目を見張る。ライ動き・言葉から彼の有能さを軽くはかろうとしていた。

「そのとおりです。以前、パーティーに参加した時に兄上達にはご挨拶を申し上げたのですが、姉上はそれが適わなかったので、今日訪れたというわけです」

「……それは失礼した。私もユフィも思うところがあったな」

「……………エリア１１のことでしょうか？」

「ッ……！」

コーネリアは思わずライを睨みつける。自分の失態を笑っているからと思ったからこそその行動だったが……ライの表情は真剣そのものだった。

「お気に障るようなことを言ってしまうすみません……ですが、今度は私が合衆国日本に攻めるにあたり、姉上の意見を伺いたいと思っております……」

「なるほど。それが一番の目的か」

「いえ、あくまで本来の目的はご挨拶だけですよ」

ライは軽く笑みを浮かべる。その表情にはどこか幼さが残っていたが、全てを包み込むような包容力が感じられる。どこか逆らいがたいものを感じ、コーネリアはしばし考え、ライに問いかけた。

「……貴様は黒の騎士団のことをどう考えている？」

「騎士団を烏合の衆と言う者もいますが、私にとっては騎士団はもはやブリタニアに次ぐ大勢力だと感じています」

「ほう」

「特に、リーダーのゼロ。その類まれなる知略とカリスマ性はシユナイゼル兄上にも匹敵すると私は考えています」

「……」

コーネリアは感心した。

これは今まで表舞台に出なかった皇族が咄嗟に出るような言葉ではない。

少なくとも、戦場を知っている者の言葉だった。しかもゼロやし

ユナイゼルのことをよく理解している。彼女の中でライの評価は一気に上昇した。

「それに、姉上が敗れてしまった時点ですでに騎士団はそれだけの資格をもっているでしょう」

「私がか？ なぜそのように思う」

「『ブリタニアの魔女』の名は当然ながらエリア１１にも広がっています。自らも前線に立ち、騎士達にも劣らぬ武功を立てる。まるで『閃光』のようだ、と」

「！……からかうな。私にはそのような……」

「いえ、真実です。だからこそ、その姉上を退ける騎士団を警戒しているのです」

『閃光』 コーネリアが敬愛してやまないルルーシュの亡き母親、マリアンヌの二つ名である。

その言葉をもたらって、さすがのコーネリアも仄かに顔を赤らめた。

「失礼ながら、ライ殿下……勝算はおありですか？」

ダールトンが若干失礼にも聞こえる発言をする。

だがたしかにこれは重要なことだ。発軍務の皇族ともなれば、どうしても勝ちを急ぐ傾向がある。そしてその結果失敗することが多い。成功したとしても犠牲を無駄に出してしまいがちだ。

攻めるときは攻める。退くときは退く。ちゃんと引き際をわきまえなければならぬ。

「戦う以上は勝利を信じてますが……勝算は五分五分といったところだと思えます」

「やけに弱気だな。ゼロがそれほど恐ろしいか？」

「ええ。私はゼロを甘く見てはいません。確かにブリタリアと黒の騎士団との真つ向勝負なら勝算は十分すぎるほどあります……しかし、相手は策士。なにを仕掛けてくるかわからない恐れがあります。ゆえに、そう申し上げたまでです」

ライは素直に自分の意見と意思を打ち明けた。

この男はできる。

コーネリアはこの男ならば問題ないと判断した。戦いを理解し、相手をよく研究している。また自分の弱さも認めている。ライなら

ば変なミスなどおこさないだろうと、確信した。

「……だが、さすがに一度戦うち決めた以上は確実にしなければならん。」

私としても、いつまでもゼロを放っておくのは気が引けるからな」

「……それは重々承知しています」

「そうか？ ……ダールトン」

「はっ！」

「お前は日本侵攻にあたって、ライの部隊に加わりライをサポートせよ」

「なっ!？」

コーネリアがダールトンに下した命令にライは驚愕する。

ダールトンはコーネリア親衛隊の將軍であり、彼女への忠誠心も高い。そんなダールトンを自分の部隊に預けるとは思えなかったからだ。

「ダールトンは日本占領作戦にも参加していた男だ。今回の侵攻にあたっては役にあつたろう。」

それに私はおそらくしばらくの間出撃はしない。そんな私の元に優秀な将軍をおいておくよりは、弟の部隊にいられておくべきだろう」

「……姉上はそれでよろしいのですか？」

「構わん。そのかわり、必ずや結果を示せ！」

「！……はい！ありがとうございます。これからよろしくお願いします、ダールトン将軍」

「はい。「ちらこそ、ライ殿下」

ライとダールトンが握手を交わす。力強く、たくましいものだった。

「ふっ……マリーカ、貴様もすっかり自分の務めを果たせよ」

「姫様も私も、君の活躍を期待している」

「ひゃ、ひゃい！必ずや、ご期待にこたえてみせます！！」

そしてコーネリアとギルフォードは後方に控えていたマリーカに声をかける。

彼女のごことはよく知っている。是非とも戦功を立てて帰ってきて



ライの言葉を受けてダールトンは豪快に笑う。敬語ではあるが、どこか接しやすさを感じる人柄だった。

「たしかにその一面もありますな。しかし、姫様は一度認められた相手にはとことん尽くす一面がありました……昔はユーフェミア様の場合にも、そのような方がいらっしやたのです」

「へえ。一体誰なんですか？」

「……今は亡き、ルルーシュ殿下。そしてナナリー殿下です」

「!？」

ダールトンはためらいながらも口にした。ライの親友だった男と、その妹の名を。

「そのお二方はユーフェミア殿下とも交流がありましたのですが……お二方がエリア１に送られ、亡くなられてからというもの、姫様はお二方のことまで『力なき弱者』とまで扱うようになり、以後ユーフェミア様だけを寵愛するようになり……」

「……それ、本当ですか？」

「はい。今となってお二方の名前さえ出さなくようになりまして

……」



「……」

おかしい。

ライはこの時疑問に感じた。話がかみあわない、と。そもそも、ライがコーネリアが妹想いだと思っていたのは、世間的な話しもうだがルルーシュから過去　ブリタニア本国で過ごした幼少時代のことを聞いたからである。だが彼はコーネリアとはそれほど親しくは無かったと言っていた。たしかにマリアン又つながりでの交流はあった。だが、どちらかと言うとナナリーのことばかり見ている。『あの人は完全なシスコンだ』とシスコンが言っていたほど。

ツンデレか？

ライは咄嗟にそう考えるが……すぐにその想像をかき消す。ありえない。あの人がデレるなんてありえない。デレ期なんて存在しない、と。

なのでライは結論づける。

きつとあれだ。ルルーシュも初恋の人との美しい思い出以外は全て嫌なものなのだろう。コーネリアも近くにいるユーフェミアが可愛すぎたのだろう。そしてその妹を狙っている弟を警戒していたに違いない。

そうしてライはこのことについて考えるのをやめた。

もはやコーネリアは味方であり、ルルーシュは倒すべき宿敵で二度と会うこともないのだから……

## 第九話 集結

……ブリタニア本国 夜……

「……ッ！ ラ、ライ殿下！ ……は、激しすぎます！」

「なにを言っているんだマリーカ。こんなの、まだまだだよ！」

「ああッ！」

マリーカが激しいと言っているが、まだまだだ。実際、カレンとやる時はもっと動きが激しい上に速い。

マリーカも成長はしているが、それでもカレンには及ばない……まあ、マリーカとやるのは初めてだから彼女がこう言うのは仕方のないことではあるけれど。

……そういえば藤堂さんの突きも激しかったな。一度見たことがあるけれど、あの千葉さんがあつという間にK・O・していたし。千葉さんがあんなに取り乱している姿は初めて見たが……

「そろそろ……いくよー！」

「……！ きゃあッ！」

グロースターの銃撃を避けながらも接近していく。そしてすれ違  
いざまにランスで突き込む。

マリーカのグロースターもランスで受けるが、勢いを完全に殺す  
ことはできずにマリーカのランスは弾き返された。

倒れそうになった彼女のグロースターの腕を掴み、機体を支えた  
ところで戦闘終了。

……今は、僕とマリーカがナイトメアでの実戦訓練をしていた。  
決して疚しいことなどはしていない。

「今日はここまでだ。終わりにしよう」

「……はい。ありがとうございました」

やはりマリーカも疲れているように見える。



……へたすればもう四聖剣とも互角に戦えるかもしれない。

陸上での戦闘のみだったナイトメアが空を飛べるようになったことで、たしかに戦いも有利になったが、当然のことながらその分操縦も難しくなってくる。

空中での回避行動や陸上の敵へ向けての降下予測、相手も空を飛べるのなら空中での戦闘訓練も必要。

事実、最初のシミュレータではマリーカのヴィンセントとの適合率は50%にも満たなかった。

陸上での戦闘に慣れすぎたというのも原因だが……それが今では70%にまで伸びたと言う。本当に頼もしいな。

「頼りにしているよ。だけど、やはりシミュレータと実戦は違う。相手の戦法や目的も変わってくるだろうし……これからも精進を続けてくれ」

「はい！ 殿下のご期待に答えられるよう、精一杯頑張ります！」

「うん。期待しているよ」

「……殿下、宜しいでしょうか？」

「？ ジェレミア卿か。どうした？」



場所を移してライが住んでいる離宮。  
今その場所に、ライに忠誠を誓ったブリタニアの猛者たちが一同に会していた。

「……ライ殿下はまだ来られぬのか？」

ブリタニア人にしては珍しい黒髪・黒目の青年が口を開く。  
男の名はロー・ペンバー。普段から口数が少ない寡黙な性格。その絶対零度のような冷たい目は冷静に、感情に流されること無く戦況を見渡し、またナイトメアの操縦にも長けていることからブリタニア軍内で数多くの功績を立てた男。

ジェレミア卿の数少ない朋友であり、今回は彼の誘いに応じてライの部隊に加わった。

「なんでもマリーカさんとの一対一での訓練をしているそうですね。一体なんの訓練なのかは知りませんが（笑）」  
先ほどジェレミア卿が呼びに行きましたよ……本当、なんであんな暑苦しいおっさんを重用してんだが」



金髪のまだ若い騎士が発言する。最後の発言は少しトーンを下げて小声で話していたが……

名前はレイ・カンデラ。歳は22歳と、この中では最年少の騎士である。出自・能力共に問題ないのだが……その性格から以前の上司と問題を起こして左遷されたブリタニア軍きつての問題児でもある。

ライとの年齢が近く同性であることもあって、意外と交流は深い。

「……口を慎めレイよ。その言葉はライ殿下への侮辱にも当たる。不用意な事を申すな」

「はい。すみませーんホルトン將軍。ミーはこのとおり大いに反省してまーす」

白髪の男性がレイを咎める。静かだが、有無を言わせない重みがあつた。

リーガル・ホルトン。メンバー最年長であり、『血の紋章事件』も経験している老將軍。「老いてなお盛ん」の言葉を再現するように、若いものにも負けずに指揮能力・ナイトメア操縦に長けた男。

ダールトンの先輩でもあり、実質的な軍務の総責任者である。

「しかし自らナイトメアに乗り、ご指導までなされるとは……殿下には驚かされるばかりですな」

賞賛の声をあげるのは、青髪の真面目そうな30代前半の男  
テスラ・イプシロン。

一兵卒からの叩き上げの将軍。ブリタニア帝国・皇族への忠誠心も厚く、能力も高いライのことを尊敬し、自ら日本侵攻のライの部隊への参加を表明した。

「はっはっは。ブリタニアにも未来を担う若い者が成長するのはよいことだ！」

ライ殿下は将来、シュナイゼル殿下やコーネリア殿下とも肩を並べるかもしれんな」

豪快に笑い飛ばしたのが歴戦の猛者、アンドレアス・ダールトン。  
コーネリアの腹心の将軍だが、この作戦にあたってコーネリアがライの元に派遣した。

一際大柄の壮年で、戦術・戦略の要となっている。

「……ハッ。だが、初軍務で役割を果たせなければ何の意味も無い……」

逆にライに対して冷たい発言をする者もいる。

髪がオレンジの中年の男　　ボア・リユードベリ。勇猛果敢な戦士であり、常に最前線に立ち続けるブリタニアの闘将。若干血の気が多いのが難点。

「いや」。実際殿下なら何の問題もないと思いますよ。僕もあの方の実力には思わずぞつとしちゃいましたからね」

「……はい。本当にあの方は本物だと思います」

楽観的に自分の意見を述べたのはその身に白衣を纏ったマッドサイエンティスト　　ロイド・アスプルンド。

ナイトメア開発など、技術開発担当の責任者。新型のナイトメアの開発も行っており、ライの隊のナイトメア配備を充実させた男である。

そしてそのロイドの言葉を受けて発言したのは彼の補佐官、セシル・クルーミー。

ロイドの補佐を行いながら、庶務全般での活動をしている。

ちなみに普段は温和な性格だが、怒らせるとライ以上の権限を持つ数少ない女性。

「もともとライ殿下はそれだけの実力を陛下に示したからこそ、今回の任務を命じられたんです……あ。ちょうど来たみたいですよ」

ライのことをよく知っているように話したのは彼の選任騎士カレン・シュタットフェルト。

その実力は誰もが認めており、ナイトメア操縦においては他を寄せ付けない。ライとはお互い愛し合っており、時には主君と騎士の関係も忘れてしまう。

「……すまない。待たせてしまったね」

入ってきたのは彼らの主。

見たもの全てを魅了するような存在。

王の風格と騎士の器を併せ持った選ばれし者  
ライ・エル・ブリタニア。

この個性あふれる強者たちをまとめる総司令。

その隣に立つのは彼の従卒にも任命された少女　マリーカ・ソレイシイ。

若干15歳という少女。カレンとの因縁から解放された彼女は急成長を遂げ、ライからの信用をたしかに勝ち取った。

そしてライの親衛隊隊長　ジェレミア・ゴットバルト。

忠誠心は人一倍で任命以前からライのために駆け回っており、ライが一番信をおいている人物。その実力はラウンズ級である。これだけの人材を集められたのは間違いなく彼の働きがあつてこそのことだ。一番の功労者と言つても過言ではない。

主の出現に、騎士達は姿勢を正して膝を着く。

ライの許可の言葉を受けて彼らは立ち上がり、各々の席に着いた。

全員揃つたことを確認し、ライが発言する。

「今日は夜分に集まってもらつてすまなかつたね。だが、この時間帯だからこそスパイなどが現れても問題なく対処できると思つてね」

「……それで殿下へ。ミー達を呼んだということは……もう準備ができてゐるつてことですよね？」

「いよいよですか……」

レイとテスラの発言で、部屋の空気が変わる。  
ライの表情も真剣そのもの。ライは静かに顔をあげると……全員  
に告げた。

「……明日の夜明けと同時に、日本に攻め込む」

それはこれから始まる大決戦の準備が完全に整ったということを示していた。

かつての仲間達との悲しく、そして壮絶な戦いは、近い。

開戦の時

## 第九話 集結（後書き）

この中での新キャラのうち、一人は次回作候補の『狂王と戦乙女』の登場する予定です（名前は変わるとは思います）

## 第十話 作戦会議（前書き）

これがおそらく年内最後の更新となります。

皆さん今年は本当にありがとうございました！ 来年もよろしくお  
願いします！



## 第十話 作戦会議

「明日の夜明けと同時に、日本に攻め込む」

ライが自分につき従う部下達を前にして宣言した言葉。

それはまさに、ライと彼の旧友たちとの完全なる決別をあらわしたものだ。た。た。た。

ライがブリタニア皇帝・シャルルより、合衆国日本の掃討を命じられてから二十日余りがたった。人員・武装共に準備は整っている。命令があれば、いつでも出撃が可能だ。

主の言葉を受け、騎士達の顔も戦場のそれと同様になっている。

「今日は、前回君達にデータで送った作戦をこの場で改めて協議する。何か意見があるものは誰でも、どんなことでも申し上げてくれ。この場において、身分の上下は問わない。

……まあそんなに固くならず、紅茶でも飲みながら話そうじゃないか」

各々が事前にライよりうけとった資料を取り出す。日本侵攻のルート・軍編成・戦略目的などがこと細かく書かれている。今回の侵攻戦にあたってライが作成したものだ。

今日彼らが呼び出されたのは指揮官である彼らと会議・最終確認を行うためでもあった。

ライは仕えているメイドが運んできた紅茶とケーキを各将に配らせると、皆に勧める。

「……………殿下。しかしながら……………」

「ん？ どうしたロー……………ああ、そうか。僕が先に口にしなければならぬか」

「……………そうではなく……………」

口数が少ないローが一度ケーキに視線を移した後、ライに珍しく話しかけた。

ライはその様子を見て、臣下が主君を差し置いて先に食事をとるわけにはいかないとローは思っていると感じた。

なので、自分が最初に食べ始めなければ始まらない。

ライは一口ケーキを口に運んだ……………しかし……………

「……………！？ うっ……………！！」

ケーキを口にしたらライが、口に手を当てて……………床に倒れこんだ。

「……………殿下！？……………」

「……やはりか」

他の者が驚愕するなか、ローはどこか予想通りでも言うように呟いた。

……実を言うと、ローとレイの二人はここに来たときに見てしまったのだ。セシルが、離宮の調理場に赴き、メイドと何か話しかけているのを……

「セシルさ〜ん。一体このケーキに何入れました？」

レイも同じ結論にたどり着いたのだろう。

おそらくこの元凶である彼女にこのケーキに何を仕掛けてたのか尋ねる。

……余談だが、ここにいる者達は皆セシルの料理を経験してしまっている。ゆえに、彼女の料理がどれほどの破壊力を秘めているのか、その身をもって知っているのだ。

「変なこと言わないでください！！ 私は普通に作っただけです！！」

「……皆さんお気をつけください。このケーキ、普通に致死性の毒が入ってるみたいで〜す」

レイが皆に呼びかけるがもう遅い。すでに主・ライはケーキを食

べてしまった。

ジェレミア達が傍に駆けつけるが……ライの意識はどんどん薄れていく。

「……セ、シル……さん……」

「殿下、喋らないでください……いえ、やはり喋り続けてください！」

「意識を確かに！ 眠ってはなりません！！」

「すぐに医師を呼べ！！」

今意識を失えばへたすればそのまま眠ってしまう可能性がある。ゆえにジェレミア達は必死にライに呼びかけた。だが、騎士達に返している言葉はあまりにも弱々しく、今にも消えうせてしまいうなほどだった……

「………今まで、味わった事がないような……新鮮な味でしたよ………」

「」「殿下ああああ……！！！！」「」「」

「「このような目（毒殺未遂）に会われても、それでもなお部下を気遣って……！！」

「一生ついて行きます！！」

「殿下！！ あなたの勇気と男気、私は一生忘れません！！」

そのような状況下で、責めることなくセシルを気遣うライに騎士達は感動さえ覚える。

皮肉にも、この瞬間が騎士達のライに対する忠誠が今までで一番高まったときだった。

……というかテスラよ。感服するのは良いが、勝手にライを殺すな。

「……………」

「……………殿下？ 殿下！！」

それだけ言うと、ライはその目蓋を閉ざした。

ジェレミアが何度もライに呼びかけるが、返事は返ってこない。

愛する母と妹を守るために、若干12歳という若さで王の座まで上り詰めた若き秀才。

この時代においても、彼のパートナーであるカレンと共に大国・ブリタニアと戦い抜き、ついには黒の騎士団の双壁と味方に謳われ、

敵に恐れられた戦士。

そして再び皇子としてブリタニアに舞い戻り、騎士団を震え上がらせた猛者。

1000年に一度 いや、1000年に一度生まれるかどうかの風雲児はこうして再び眠りに着いた。

この時、ライ17歳。今大きく世界にはばたこうとしていながら、その才能をいただいたまま……………

【コードギアス 相反のライ〜双璧の軌跡〜】完。

皆さん、ご愛読ありがとうございました。

ミーの大活躍と、すたく先生の次回作にご期待ください！

「何を言っておるかレイ！！」

「殿下……………また、私は……………今度はライ殿下まで……………！！」

「そんな……………私が人口呼吸を……………！」

「あ！ シュタットフェルト卿ずるいです！」

「……………ねえ。君達がノリノリなのはわかったからさー、僕に殿下を診せてくれる？」

開き直るもの、悲しみに浸るもの、欲に走るもの……………騎士達はそれぞれ思いに浸った。



れほどまでに曲者ぞろいが集まっているというのに、集う者達の心を一つにしたのはブリタニア建国以来初めてのことでないだろうか。

「さて、脱線してしまったが話しを戻そう。

……今回の作戦は皆にも事前に申したとおり、日本の首都・トウキョウが戦略目標だ。ジェレミア卿、頼む」

「はっ」

ライに返答し、ジェレミアがライのすぐ横に立つ。ジェレミアが目配りすると、部屋の隅に立っていた給仕達が一礼して部屋を退出していく。

そして、その扉が完全に閉められた事を確認すると、ジェレミアは口を開いた。

「それでは、これより現在の日本の情勢について説明させていただきます。

僭越ながら、司会はこの私ジェレミア・ゴットバルトが全力で務めさせていただく」

ジェレミアが言うと、上から巨大なモニターがゆっくりと降りてきた。

他の者達も全員意識をモニターに集中させる。こういつ意識の切り替えはさすがというべきだろう。



「全員知つてのとおり、トウキョウは現在の日本の首都であり、政治・経済の中核である。また、世界屈指の要塞都市でもある。ここを落とせば日本にとっては大きな痛手であり、我々にとっては日本侵攻にあたつて最高の足がかりとなる」

モニターにトウキョウ周辺の映像が映し出される。中にはかつてブリタニア政庁だった場所も見える。要塞都市というだけあって守りは堅い。ただでさえ攻撃側と防衛側では、防衛側の方が有利なのである。一般的に攻撃側は防衛側の二倍から三倍の戦力が必要とまで言われる。守りに徹しられたらなかなか落とせないだろう。

日本人は一度ブリタニアの植民地にされた経験から、二度と他国に支配されまい、と言う気概を持っている。そのため士気も高いだろう。

だが逆にトウキョウさえ落とせば、戦況はブリタニアに優位に働く。

「次に黒の騎士団の戦力についてだ。騎士団もナイトメア開発が進んでいる。

敵は独自のフロートユニットをも開発し、騎士団のナイトメアも空中戦が可能となっていることが判明した。

まだ数は出揃ってはいないだろうが、それでも騎士団の要注人物達には全員与えられているだろう」

騎士団特有のフロートユニットの写真。ブリタニアの翼型と違って、短いX字型の外観となっている。見た目は全然違うが、性能はほとんど同じと考えていいだろう。

そして続いて黒の騎士団の主要メンバーが一人一人出てくる。  
ゼロ、藤堂、四聖剣……そして、スザク。

「騎士団で要注意すべきはこの者達だ。

ゼロは操縦はそれほどではないが、あの者の指揮能力・カリスマは卓越している。

続いて藤堂と四聖剣。彼らは旧解放戦線の軍人。今の騎士団の主力だ。

……そして、枢木スザク。ランスロットのパイロットである。现阶段では彼が一番の障害だろう」

枢木スザクの名前が出た瞬間、メンバーの表情が変わる。

悲しく思うもの、嫌悪感をかもし出すもの、苦々しく思うもの……人それぞれである。

「……まあ、そんなのどうでもいいですよ。どうせ、騎士団の双壁とやらはいないんでしょ？」

「ああ。黒の騎士団の双壁はすでに無く、注意すべきはこの者達くらいだ」

レイが場の雰囲気を変えようと、話題転換とばかり双壁の話しを

出す。

……表情には出さないが、ライモカレンも複雑な状況だった。

スザクという最強の戦士を手に入れたが、その分騎士団は黒の騎士団の双璧を失った。実質的にはプラマイゼロである。

「新型ナイトメアなどの詳しいデータまでは確認できなかったが、性能はヴィンセントと同等と考えてよいだろう。その点を忘れずに油断はせずにいただきたい。」

……日本・騎士団の報告については以上だ。他に何か聞きたいことはあるか？」

全員を見渡すが、特に誰も意見は出さない。

敵については十分理解できたのだろう。残る問題は、それに対して彼ら自身がどういう風に動くかだ。

「それでは、今回の討伐軍における軍編成を発表する」

モニターの映像が再び変わる。

今度はブリタニア軍の騎士達が各々の場所に布陣されている映像だ。

「今回の作戦において我々は前軍・中軍・後軍の3つの部隊に分かれる。

前軍、右翼を指揮するのはダールトン・ボア。中央は私とロー。左翼をマリールカ・レイ・テスラが指揮をとる。

中軍はライ殿下とカレン。後軍にアヴァロンを設置し、ホールトンが指揮をとる。

進軍にあたり、我々は太平洋を通り、ベスタ島にて補給を行ってから日本本島に進撃する。

ここまでで何か質問はあるか？」

「はい。ミーが質問します」

「なんだレイ」

レイが積極的に質問する。

ちなみにベスタ島とは太平洋に浮かぶ小さな島で、ブリタニア領土となっている場所。日本とブリタニアの中継地点のような場所である。

「なんで殿下をアヴァロンに搭乗させないんですか？ アヴァロンの防御力くらい、ジェレミア卿の残念な頭でも知っていますよね？ 事実、皇族の方は後軍で全軍への支持に徹するのがフツースし、シュナイゼル殿下だってアヴァロンで後ろに下がっているじゃないですか」

レイがもつともな意見を出す。

アヴァロンの防御力は軍艦最高といってもいい。改良に改良をか

さね、今の状態なら輻射波動砲弾とて防げるほどの防御力だ。また、アヴァロンにはハドロン砲は装備されていないがレーザーガン、つまり電磁加速砲は七門装備されているため攻撃も問題ない。

ちなみに電磁加速砲とは、リニアモーターカーと同じ原理で電磁石を利用し、砲弾を発射する砲のことである。初速が速い分、運動エネルギーが増すので同口径の火薬式の砲よりも威力がある。

さらに、電磁加速砲は磁力の反撥力で砲弾を発射するので砲身と砲弾が接触せず摩擦が起きないので速射が可能なのである。

「それについては僕が説明する」

ジェレミアに代わってライが話します。

「確かに本来なら僕だってそうするさ。相手が正攻法を仕掛けてくる相手ならばな。

……だが、今回の相手はあのゼロだ。正攻法などしかけてくるはずもない相手。今まで幾度も奇襲をしかけ、成功して来た男だ。

今回もおそらくトップ　つまり僕を狙ってくるだろう。だからこそ、あえて防御力の高いアヴァロンには搭乗せず、中軍でゼロの様子を伺う」

「……つまり、ライ殿下はゼロが今回も奇襲を仕掛けてくると？」

「ああ。僕が予想しているのはベスタ島から日本本島までの道。そ

の間にゼロが奇襲を仕掛けてくると思っている」

ライは視線をモニターに移す。

進軍予定ルート途中を指差し、ゼロが仕掛けてくるであろう点を指す。

「ならば後軍に戦力を固めたほうがよいのでは？ これでは攻めに戦力を集中させすぎです。ゼロに奇襲を仕掛けてくれと言わんばかりです」

「そうだ。僕の狙いはゼロに奇襲をさせることにある」

「……………意味がまったくわかりませうん。殿下の脳みそとろけるんじゃないですか？

なんで敵の作戦を助けるような布陣で挑むんですか？」

「先も言ったが、トウキヨウは要塞都市。守りに専念されたら攻め落とすのは一苦労だ。」

だからこそ、黒の騎士団を要塞から引きずり出し、対等な条件化で勝負を決める」

「……………そういうことでしたか」

ライの言うところによるとこういうことだった。

戦いの重点は黒の騎士団との対決。黒の騎士団さえ破ればトウキヨウとて長くはもたない。

だがもしライの周りに戦力を固めればゼロは奇襲を諦めてトウキヨウの守りを固めるに違いない。そうなればトウキヨウを攻め落とせず、黒の騎士団も破れずということになりかねない。

騎士団からしてみても本国からの援軍が来るまでに片付けたいはず。国力ではブリタニアの方が上なのだ。となるとゼロからしてみればこれまでどおり、一刻も早く敵将を倒して油断した敵軍を打ち取り、戦力を温存したいはず。

そしてそうなったときのためのこの布陣なのだ。

騎士団がアヴァロンを制圧しようとしても、あの堅固な守りを突き破るのは容易ではないし、指揮をとるのは歴戦の猛者ホールトン將軍。兵達の信用も厚く、そう簡単には倒せる相手ではない。

そしてその間に中軍からライとカレンが出撃する。そうなれば騎士団は今度はそちらに注意をむける。そうなれば敵がもたつき挟撃も可能になり、そこに前軍部隊が駆けつければ黒の騎士団は袋のねずみというわけだ。

「……よくそんな清々しい紳士のような顔をしてこんなえげつない作戦思いつきますよね。」

到底同じ人間とは思えなせん。だけどそこにシビれる、憧れるウ！」

「……一応ほめ言葉と受け取っておくよレイ。」

さて、理由については述べた。他に何か貴公達から意見はあるか

「？」

「……………何も」

「ミーもありません」

「殿下がそこまでお考えならば、私の方から申し上げることはありません」

「お好きにどうぞ」

ライが全員に問いかけるが、特に意見はないようだ。  
ここまで自分で作戦を立てられるならば、指揮も問題ないと判断したのかもしれない。

「わかった。ならば今日の目的はここまでだが、出陣前に一つ貴公達に言っておく……………死ぬな。生きる」

「……………」

「死んでしまつては何の意味もない。命あれば再び立ち上がることもできる。

指導者ゼロを捕らえるのは重要事項だが、貴公達歴戦の猛者が生き残るのは最優先事項だ」

ライの発言に騎士達は呆然とする。



……ああ。この人は騎士の資格があっても、軍人にはなりえない。弱さとも取れる甘さ。それがライの長所であり、短所であった。

「……承知。元より、死ぬ気などありません」

「わかりましたけど……間違っても戦場ではそんなシヨコラテよりも甘ったるいと言わないでくださいね。

逆に戦意がうせますし、あんなやつらにミーが殺されるなんて冗談もいいところなので」

各々思つるところがあるだろうが、騎士達は了承し、ライに一礼して去って行く。

残ったのはライ・カレン・ジェレミア。

使用人達も後片付けに入ってくるが、そんな中ジェレミアが口を開いた。

「殿下。私の方から一つよろしいでしょうか？」

「ん？ なんだジェレミア」

「なぜ、出撃が明日の夜明けのですか？ 兵達の休養なら十分取らせてあります。」

こちらの準備が整ったならば、騎士団にあまり時間を与えないう



一方、同じころ日本でも会議が行われていた。  
司令室には騎士団の幹部が全員集められている。

ゼロをはじめ、藤堂、四聖剣、スザク、扇といったメンバーである。

『……以上が、今回我々がとる作戦だ。何か意見がある者は？』

「確かに戦力で劣る我々に奇襲は必要不可欠だ。だがしかし……」

「そつだ。今回俺達は防衛側だろう？ なら無理に出撃せずにトウキョウに籠城した方がいいんじゃないのか？」

『確かに、相手がかつての我々のようなレジスタンスが相手ならばそれで問題ない。』

だが相手はブリタニア。時間をかければ援軍もくるだろう。そうなれば我々に勝ち目は無い』

「それは……そつだな……」

ゼロの意見に扇は黙り込む。

あらゆる面で日本はブリタニアに劣っているのだ。ならば彼らには短期決戦しかない。

『よし、ならば今日のところはここまでだ。ブリタニアもおそらく近日中に攻め込んでくるだろう。その前に、私の方からお前達に言っておく。』

……戦え！ 死ぬまで戦い続ける！ 負けてしまっただけは何の意味も無い、またエリアーの姿に戻るだけだ！！』

「「「……ッ！」「」」

ゼロの言葉で、彼らの脳裏には占領時代の日本の姿が思い浮かぶ。負ければ再びあのころに戻る。また日本の誇りを、名前を奪われる……

『ライ・エル・ブリタニアを……見つけ出して殺せ！！！！』

だからこそ、ゼロはかつて自分達を守ってきてくれた親友の殺害を命じる。

交わっていたはずの道は、もはやかけ離れてしまった……



## 第十話 作戦会議（後書き）

メンバーの中での権力図

セルル>越えられない壁>カレン ライ>越えてはいけない壁>ホルトン>ダールトン ジェレミア ロイド>ロー テスラ ボーア>レイ>マリーカ

なんだかライとルルーシュが正反対みたいになっていますけど、今回はお互いの目的が違いますからね。特に日本からしてみれば負ければ即終了ですし。

感想、誤字脱字の指摘、ご意見などいつでもお待ちしております！！

## 第十一話 出陣（前書き）

謹んで新年のご挨拶を申し上げます。  
皆さん今年もよろしくお願いします!!

これが今年初めての私の投稿です。  
なぜなら……『出陣』だからです!!

## 第十一話 出陣

会議から一夜明け、兵士達はそれぞれ出陣に向けての準備を進めている。

そんな中、ライから命を受けた彼の直属部隊

ホワイト・ナイツ  
『白の騎士団』

が呼び出されていた。

早朝から訓練を行っていたが、呼び出しに応じてライの元へと赴く。

臣下の礼をとると、彼らを代表して中年の男が前に出てライに挨拶する。

「ライ隊長。命を受け『白の騎士団』、全員参上しました」

「ああ、すまないな。忙しい中よく集まってくれた」

ライを隊長と呼ぶ者。喋っているのも日本語である。

実を言うと、この部隊は全員が日本人で構成されている。つまり、黒の騎士団の離脱者だ。ライとカレンを信じ、日本を捨ててでも共に戦うことを選んだ人物である。

それだけ黒の騎士団にとって『騎士団の双壁』という存在は大きかった。まだ若いながらも戦場に立つ事を選び、その姿から日本人の希望の星とまで呼ばれていた。そんな彼らを尊敬までしていたのだ。



当初こそ40人ほどのメンバーが在籍していたが、やはり日本への愛着か、旧友への未練か、あるいはブリタニアへの嫌悪か……離脱者が現れだした。

現在は20名足らずの人員である。

『来る者は拒まず、去る者は追わず』。ライは脱走者を咎めなかった。この姿勢を受けて残り続けたのが『白の騎士団』である。黒の騎士団　ゼロと相反する者達の部隊だ。

そしてこの隊の隊長が今ライの目の前にいる男　みやもとたけし宮本武である。

黒の騎士団にはナリタの戦いから在籍し、一番隊副隊長を務めていた人物だ。ナイトメア操縦に長け、他隊員から信用されていることもあって隊長に任命された。

「……皆にも伝わっているだろうが、明日の夜明けに我々は日本へと出陣する」

「……………はい」

分かりきっていたことだ。ライとカレンにつき従うということは、それは故郷への、戦友達への裏切りであり、道をたがえるということくらい。

だがそれでも、自分で決断したはずなのに他人から言われると迷いが生まれる。

本当に良いのか？ このままこの道を選んで……本当に良いのか？

「今回の戦いは、日本への侵攻だ。つまり今までの同志であった黒の騎士団と、仲間であった者達と、背中を預け合っていた者達と戦うことになる。

貴公達の家族が、友がいる 生まれ育った故郷と戦うことになる」

「「「……………」」」

かつてブリタニアは日本を占領し、植民地と化した。

彼らはその現状を是とせず、再び日本を取り戻すために立ち上がった者達だ。

それなのに、彼らは今ブリタニアにいる。日本を滅ぼそうとして  
ブリタニアがわいる敵側に……日本を敵に回して……

「これは最終通達だ。

……去りたいものは去れ。幸いにも今から準備すれば、荷物をまとめてからでも我らブリタニア軍が出陣する前に日本にたどり着けるだろう。そして、騎士団に合流することもできるはずだ」

「……………！？ 隊長、何を……………！！」

てつきりライは『私のために戦え』『故郷を捨てる』など、そういう言葉を発すると彼らは思っていた。

だが、実際はその逆。自分のために戦うことを命じるどころか、騎士団に合流したいものは合流して構わないと言っている。そのため時間を確保したのだと。

「私には貴公達を縛り付ける権利などない。先も言ったがこれは今までの戦いとは違うのだ！」

同胞との戦いになる。故郷への裏切りになる。勝ったとしても君達には『裏切り者』の名が付きまとう。

もし真に日本のことを憂えるならば……今からでも遅くない。日本へ戻れ。ゼロも君達のことを咎めはしないだろう。全てを捨てても、私達について来てくれる者達だけ残ってくれ。

……今までよく仕えてくれた。ここで去っても私は責めはしない。君達の覚悟に、心から感謝する」

そう言つとライは立ち去ってしまった。

戦士に命令を強制するのではなく、ただ道を示しただけで王は去ってしまった。

今ならまだ引き返せる。確かにそのとおりだ。

残った戦士達に戸惑いの色が広がっていく……宮本は一人、拳を力いっぱい握り締めた。





「……キューエル、行ってくるね」

ある者は、今は亡き者に対して誓い……

「ではコーネリア殿下……これにて失礼します」

「ああ。期待しているぞダールトン」

「……」  
「ご武運を」

ある者は、自分の主君に挨拶を告げ……

「はっはっは。どうしたレイ？ 腕が鈍ったのではないか？ ポー  
アも遠慮はいらんぞ？」

「……」  
「……まだだジェレミア！」

「腕ならしはここからでしょうが!！」

ある者は、戦いに向けて闘志を燃やし……

「すみませうん。このパフェもう一つプリーズ」

ある者は、戦いに向けて戦意と体力を温存し……

「……………ここまでとするか」

ある者は、情報の確認を行い……

「ロイドさん。紅蓮も準備はできました」

「そっか〜……いよいよだね、セシル君」

「……はい」

ある者は、離れてしまった少年の身を案じ……

そして、ついに出陣の時がきた。

ライをはじめとして、ブリタニアの騎士達が集う。準備は整った。いつでも出発できる。

「……隊長!!」

「ん？ ……ああ、来てくれたか」

騎士達が次々と戦艦に乗り込む中、『白の騎士団』が全員やってきた。

その瞳にはもう迷いはない。

「隊長。我らは隊長達に憧れ、ともに戦う道を選びました。

たとえ裏切り者の名を冠することになるうとも、ここにきてお二人を見捨てて日本へと戻るような卑怯者に成り下がりはたくはありません！ 我々はもう覚悟を決めております！



「どうか……我々『白の騎士団』を、隊長達と共に戦わせてくださいー！」

「……お願いしますー！」

宮本が隊員達の総意を述べ、隊員全員が頭を下げる。

カレンが不安そうな表情でライを見つめるが、ライは笑みを見せると隊員達に告げる。

「……わかった。貴公達にはもはや何も言つまい。

着いて来い！ 共に戦い抜き、大いに戦功をあげよ！ 貴公達の活躍を私の目に焼き付けさせる！」

「……はいー！」

皇暦2018年2月10日。

世界唯一の超大国神聖ブリタニア帝国は合衆国日本に宣戦布告した。

ブリタニア軍の総司令は第三位王位継承者、ライ・エル・ブリタ

ニア。

迎え撃つ日本軍の総司令は黒の騎士団のトップ、ゼロ。

かつての侵略戦争から7年半、合衆国日本独立から三ヶ月がたったときのことだった。

## 第十二話　ゼロの策

・太平洋　上空・

世界最大の海洋であり、またブリタニアと日本を隔てている大きな海　太平洋。

今その上空には、ブリタニアの精鋭達が乗る空母が多数飛んでいる。

その中で、ライは予定通り中軍の艦隊『カムラン』に乗っている。司令室に腰かけ、黒の騎士団の急襲に備えて警戒していた。

そんな中、先手を務めていたジェレミアから通信が入る。

『殿下。先行部隊は全員、予定通りベスタ島に到着しました』

「了解した。付近に騎士団の姿は見えるか？」

『いえ。今のところ、一つも反応はありません』

「わかった。ならばダールトン、ボーアの艦隊から補給を開始させる。他の部隊は引き続き、周囲の警戒を怠るな」

『Yes・Your Highness』

ジェレミアからの報告を受け、回線を切ると再びライは全軍の位置が移っているモニターへと視線を戻す。

「……ここまでは特に異常はないわね」

「ああ。ゼロもさすがに、このような場所で仕掛けたりはしないさ」

隣で控えているカレンの言葉にライも同意する。

もとよりライはここまでのルートでの騎士団の奇襲はまずないだろうと考えている。

もしもゼロ　ルルーシュが奇襲を行うとしても、仕掛けるならば日本に近いベスタ島から日本までの進行ルート上だと考えているのだ。引き上げの問題もあるが、ブリタニアの援軍のこともある。

総合的に考えて、日本に近い場所での奇襲の方が成功率も上がる。それくらいはゼロも知っていることだろう。

だが、だからこそ逆をついてくる可能性もある。何せ、相手は策士。お互いを知り尽くしている相手。

それゆえにライは警戒を怠らなかつた。それは旧友の実力を認め、同等以上と認めているということだった。



「私も同感です。私は以前、姫様に申し上げたことがあるのですが……どうもゼロは皇族の方を目の敵にしているようで……おそろく、今回も殿下を狙ってくるのではないかと」

「……そうか。やはりそう思うか」

戦力で劣っている場合、一番有効な手段が奇襲、そしてそれに伴って相手のトップを討つことだろう。正攻法ではまず勝ち目がない。だからこそ相手の不意についてトップを討ち、流れを自分達の物にする。

今までのルルーシュのやり方だ……もつとも、ルルーシュの場合は個人的な理由も含まれていたわけだが。

「これから先のルートが、ゼロ　黒の騎士団が一番仕掛けやすいポイントだ。

カムランの補給が終わったら前軍は再び進軍を開始。距離をあけて中軍・後軍も続く。

通信があつたならば、すぐにかけてくれ……期待しているぞ」

「Yes, Your Highness」

ここまでではライの予測どおり、今のところ両軍に大きな動きはない。







.....

……だが、一向に黒の騎士団の姿はうかがえない。

もうすでにカムランも日本とベスタ島の中央付近だ。前軍にいたつては日本・チバエリアにつくまで5分とかからないだろう。

「……おかしい。ゼロにしては動きがなさすぎる。」

まさか本当にアヴァロンへの奇襲はなしにして、トウキョウの守りを固めるつもりか？」

「ゼロも今までとは違って、今回は守るほうだから戦い方を変えてきたんじゃない？」

「……たしかにそうもとれるが……」

カレンの言うことももつともだがライにはしっくりと来ない。今までのゼロのやり方は勝利に一番近い方法をとったものだった。だからこそ、今回も少しでも勝率が高い奇襲を行うと思っていた。

それとも、ルルーシュは単純な戦力でブリタニアに勝てると思っっているのか？

一つの考えがライの脳裏をよぎるが、すぐにライはその考えを否定する。

ライの部隊はライ・カレン・ジェレミアをはじめとしたエースパ

イロツトが存在し、兵力も十分。そもそもこの戦いでライ達の部隊が負けたとしてもブリタニアそのものは負けはしないのだ。国土という絶対的な一面がある。

だからこそ、味方の消耗も少なくするため奇襲を行うと思ったのだが……

『殿下！ 失礼します』

「ん？ どうしたセシル」

ライは考えにふけていたが、セシルからの通信で思考を再び現実に戻す。

『今、トウホクへ放った偵察機が到着したのですが……トウホクに動いている部隊があるとのことです』

「……トウホクに？」

『はい。その中には指揮官機とも思われる、他の機体とは違った武装のナイトメアも伺えると』

「指揮官機……ランスロットではないんだな？」

『ええ。おそらく敵の新型と思われる』

「（新型、指揮官機……スザクではないとすると、おそらく藤堂さ

んか四聖剣の誰かだ。C・C・という可能性もあるが……目的はなんだ？ トウキヨウを攻撃する我々を内と外で挟撃するつもりか？ だとしたら、本当に騎士団は守りを固めるとでも……困とも考えられるが………)

……わかった。引き続き警戒を続けるように言ってくれ」

そう言うとライは通信を切り、今度は前軍の右翼を指揮するダールトン、ボアアにつなげる。

「ダールトン、ボアア。聞こえるか？」

「ハッ！」

「一体何のようですか？」

「偵察機からの報告によると、トウホクに動きがあるようだ。貴公達の部隊は今からルートを変更し、その敵部隊に当たってくれ。その者達をトウキヨウに近づけるな」

『Yes, Your Highness』

二人は通信を切り、ルートを変更し、北へ向かう。

トウホクは地形が複雑な場所があるかもしれないが、エリア11で指揮を執っていたダールトンもいるし、何も問題はないだろう。

問題は、ゼロ率いる騎士団本隊だ。



ジェレミアとの通信を終えるとライはため息をついた。意味がわからない。

今回の進行上、日本への入り口とも言えるチバにゼロは部隊を配備しなかった。

これはトウキョウの守りを全力で固めたか、あるいは全勢力を奇襲に向けたということにしかない。

だが、奇襲なら今こそ攻め時はずなのに、いまだに騎士団の姿はない。

守るとするならば、ゼロが今までの考えを変えたということになる。籠城戦ならばいくら要塞と言っても、援軍も呼べるブリタニアの方が有利なはずなのだが……ルルーシュが短期決戦を捨てるだろうか？

「……だが、守りに徹したと言うのならトウホクの部隊のことも理解できる。」

さすがにここからアヴァロンへの奇襲はないだろう。カレン、どう思う？

「私には難しいことはなんとも……でも、たしかにゼロの動きがおとなしいとは思っけど……」

「後は、トウキョウへ攻め込むジェレミアの報告を待ってだな。はたしてどれくらいの戦力で待ち構えていることやら……」

ライはその後、セシルとも連絡を取り合い、戦況の把握に務めた。

だがいつころに騎士団が動いたという報告はない。

すると数分後、ジェレミアから通信が入った。

『殿下!! 一大事です!!』

「どうしたジェレミア! 騎士団が打って出たのか!？」

『いえ……むしろ、その逆と言いますか……』

「? なんだ、どうした?」

ジェレミアが言いよどむ。その姿にライは疑問を覚えた。  
出撃せずに籠城ならば別に一大事と言うほどではない。だが、それにしてはジェレミアの様子がおかしい。

その答えは、すぐに明らかになった……

『トウキョウに、黒の騎士団の姿はおるか…… 一人見当たりませ  
ん……』

「……………え?」

イレギュラーに弱いわけではないが……ライは驚きの声をあげた。



通信していたとき、ダールトンが敵軍の接近に気づいた。すぐさま航空戦力が出撃する。ダールトン、ボーアの両名もヴィンセントで騎士団を迎え撃つ。

『ようやく出てきたか……さあ、戦いの始まりだ!!』

ボーアが先陣を切った。単機で敵の新型量産機 『暁』へと斬りかかっていく。

暁の小隊がハンドガンで牽制するが……遅い。ボーアは機体を高速で上昇させ、暁に狙いをつけると一直線に急降下。MVSで真つ二つに貫いた。

味方機がやられたことに気づいた他の機体がボーアに迫るが、レベルが違う。

廻転刃刀で斬りかかってくるが、最初の一機は廻転刃刀をはじめ、一閃。

さらに二機同時に迫るが、ボーアは受け止めず刀の早さにあわせてランスを突き出し、軌道をかえるとそのまま両槍が二機を貫いた。

暁を軽くあしらうと、ボーアはさらに敵を求めて暁へと向かっていく。

また一機、暁に狙いをつけた。

狙われた暁は迫るヴィンセントにハンドガンを放つが、ボーアは機体を少しずらすだけでかわす。



そして標的の暁を貫こうとした瞬間……一機のナイトメアがヴェンセントのランスを制動刀で受け止めた。

「……！」

ボーアは自分の攻撃を受け止められたことに、そしてその相手が他の機体と違うことに驚愕する。

暁と形は似ているが、全身は黒い装甲で覆われており、ランスを受け止めた刀身も大きい。

間違いなく、報告にあつた指揮官機だった。

『……この実力、ブリタニアの騎士とお見受けする』

「ああ、そつだ。私の名はボーア・リユードベリ。お前を殺す男の名だ……貴様は？」

『私は……藤堂鏡志朗だ！』

「……！ ほづ。これは……どつやら私は当たりをひいたようだ……！」

ボーアは笑みを深くする。

これ以上ないほどの極上の獲物。それが今、目の前に現れた……

「ならばここで、日本の希望を討ち取らせてもらおうか……！」

『……やれるものならばな!』』

MVSと制動刀がぶつかり合う。

ボア・リユードベリと藤堂鏡志朗。

ブリタニアと騎士団の対決は、ここから始まった……

## 第十二話　ゼロの策（後書き）

ちなみに、ライの艦隊『カムラン』もアーサー王伝説からとりました。

アーサー王の最後の戦いの場所です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9721v/>

---

コードギアス 相反のライ ~ 双壁の軌跡 ~

2012年1月6日20時35分発行